



西國三十三所名所圖會 六







西國三十三所名所圖會卷之五目錄

河内國續

通明尼寺

天満宮 本堂 藥師堂 太子堂 妙善堂 天徳日命社 鎮守社

向太夫祠 龍池 神宝畧目

菅公廟碑 名産糟

當宗神社古跡

王水井

譽田八幡宮

本社 若宮 末社 本地堂 觀音堂 十三層石塔 堂塔古跡

應神天皇陵

奥院 阿弥陀堂 辨天祠 石反橋 蛇文石 阿彌井 龍池

長峰八幡宮 御駒塚 市蛭子 御柳塚 不動石 小野道風故居 二冢山

栗冢山 放生川 善法寺跡 矢坂山 影向松 後冷泉院行宮跡 名物曹擔鈴

長野山

譽田壘

西琳寺

舟物 玉腕之圖

高屋神社

高屋古城 城地碑

安福寺

本堂 經堂 竜眼因樹 寿世堂 行者堂 國見山 舟柁 曼陀羅堂

玉手山 擴窩

尾州御廟 阿彌山堂 王井 鎮守 鐘堂

片敷山

博多川

土師八島墳 斤足羽川

伊岐宮

安閑天皇陵

石川

井徳院 碓井

春日山田皇女墓

伯太彦神社

高屋神社

安福寺

玉手山

片敷山

博多川

伊岐宮

安閑天皇陵

石川

井徳院

春日山田皇女墓

伯太彦神社

高屋神社

安福寺

玉手山

片敷山





奥田忠一墓

慶長戰場

伯太姫神社

大黒寺 大黒石

大祁於賀美神社

駒ヶ谷

杜本神社

師霧標石

金剛輪寺

本堂 觀音堂 楠公祠 正成塔 正成像 覺峰師塔

役行者加持水

日谷推宮社

壺井八幡宮

本社 權現社 壺井 神宝畧目

通法寺

本堂 觀音堂 鎮守 頼義公魂舎

上太子叔福寺

聖天院 上御殿 二天門 迴廊 淨土堂 大師堂 常光院 普門石 鎮守社 弁天祠 西帝塔 兩門塔 忍性上人塔 石塔 律院 古跡 轉法輪寺跡

普門石 鎮守社

聖天院 上御殿 二天門 迴廊 淨土堂 大師堂 常光院

燈臺臺石 良觀上人石塔

願上人石塔 中門古礎 南大門 阿加井 破石出現古趾

西方尼院

本堂 觀音堂 三尼影堂

馬子大臣塚

南林寺

佛眼寺

敏達天皇陵

石姫皇后墓

推古天皇陵

二子塚

用明天皇陵

春日神社

妙見寺 竹良御墓碑 吉繼墓誌

牡丹岩窟

春日佛師故居

飛鳥戸神社

當摩任踰

飛鳥山

飛鳥川

飛鳥假宮

山田麻呂墓

親鸞聖人腰掛石

岩屋竹内兩道岐路

科長神社 雛形胃

妹子大臣墳

萬法藏院廢跡

烏帽子石

二上嶽

名産金剛鑽

抱石

古松豎岩

硯石

不動石

巖窟

鹿谷寺廢跡

寿德天皇陵

鶯関

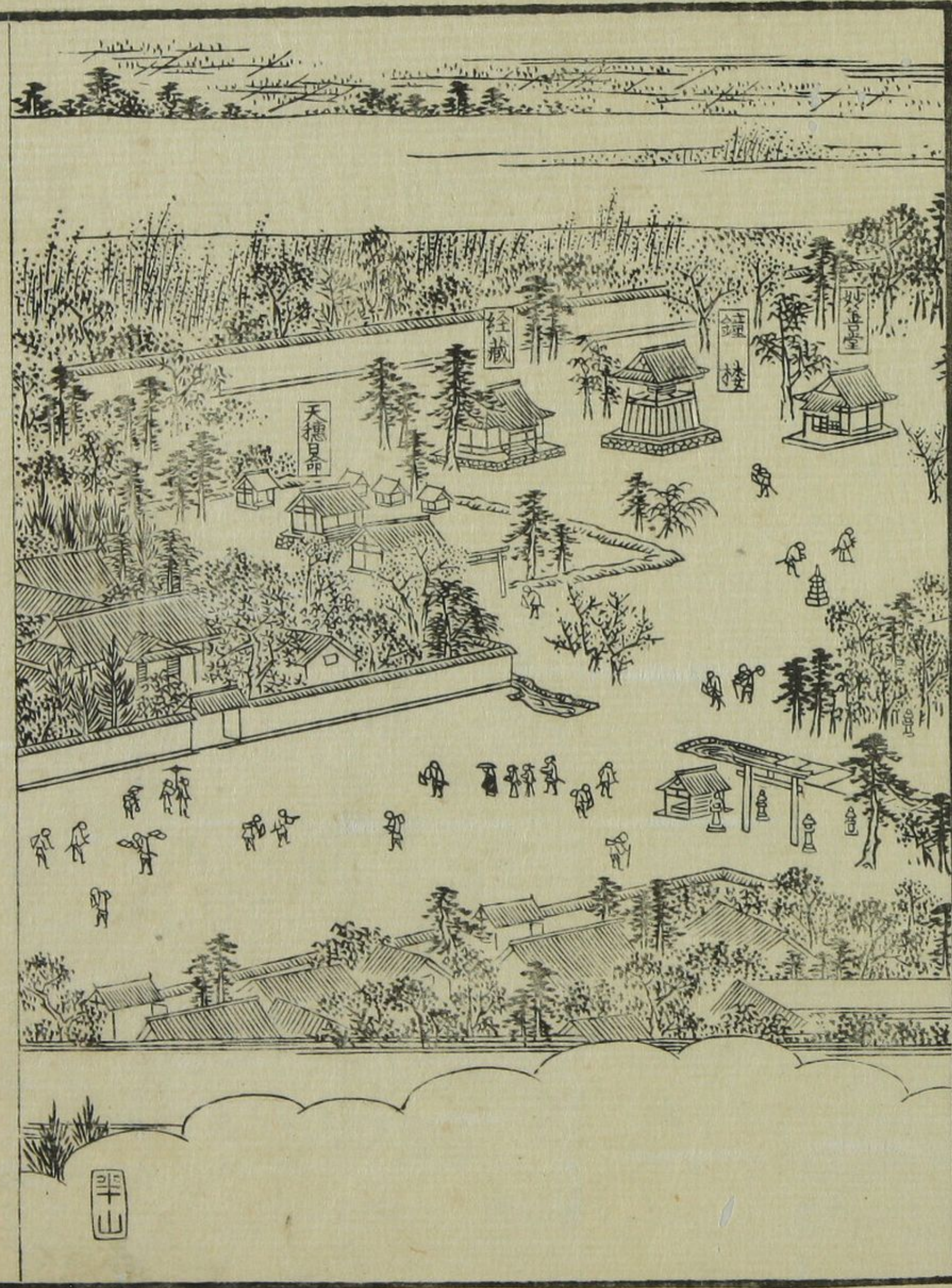
竹内嶺



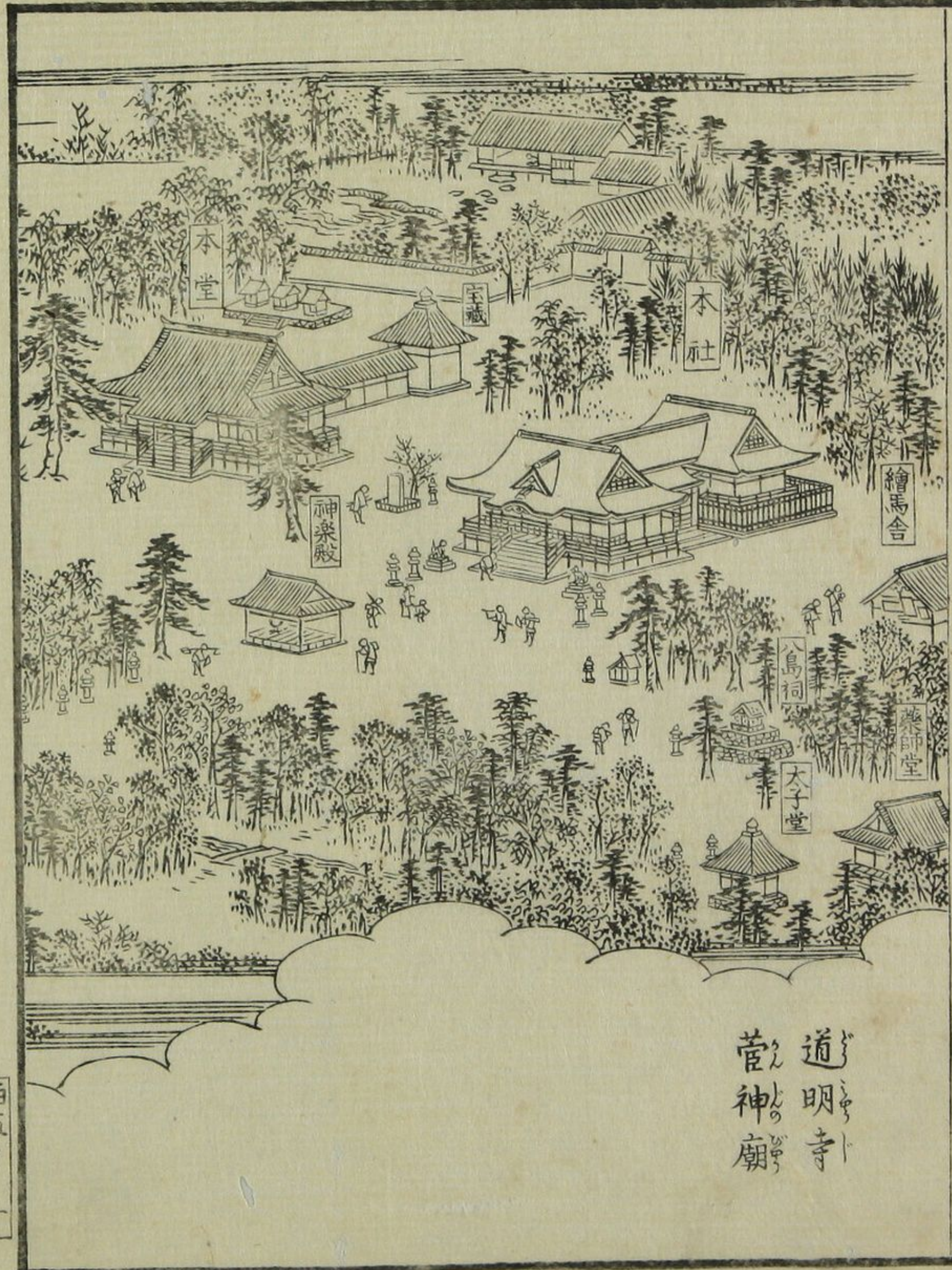
きこくがあらはのち  
及明のそまて  
林のゆきとゆき  
菅のゆきとゆき  
らつとゆきとゆき  
男女のゆきとゆき  
まひとゆきとゆき  
平野よりゆきとゆき  
ホのゆきとゆき







平山



道明寺  
菅神廟

西五ノ一



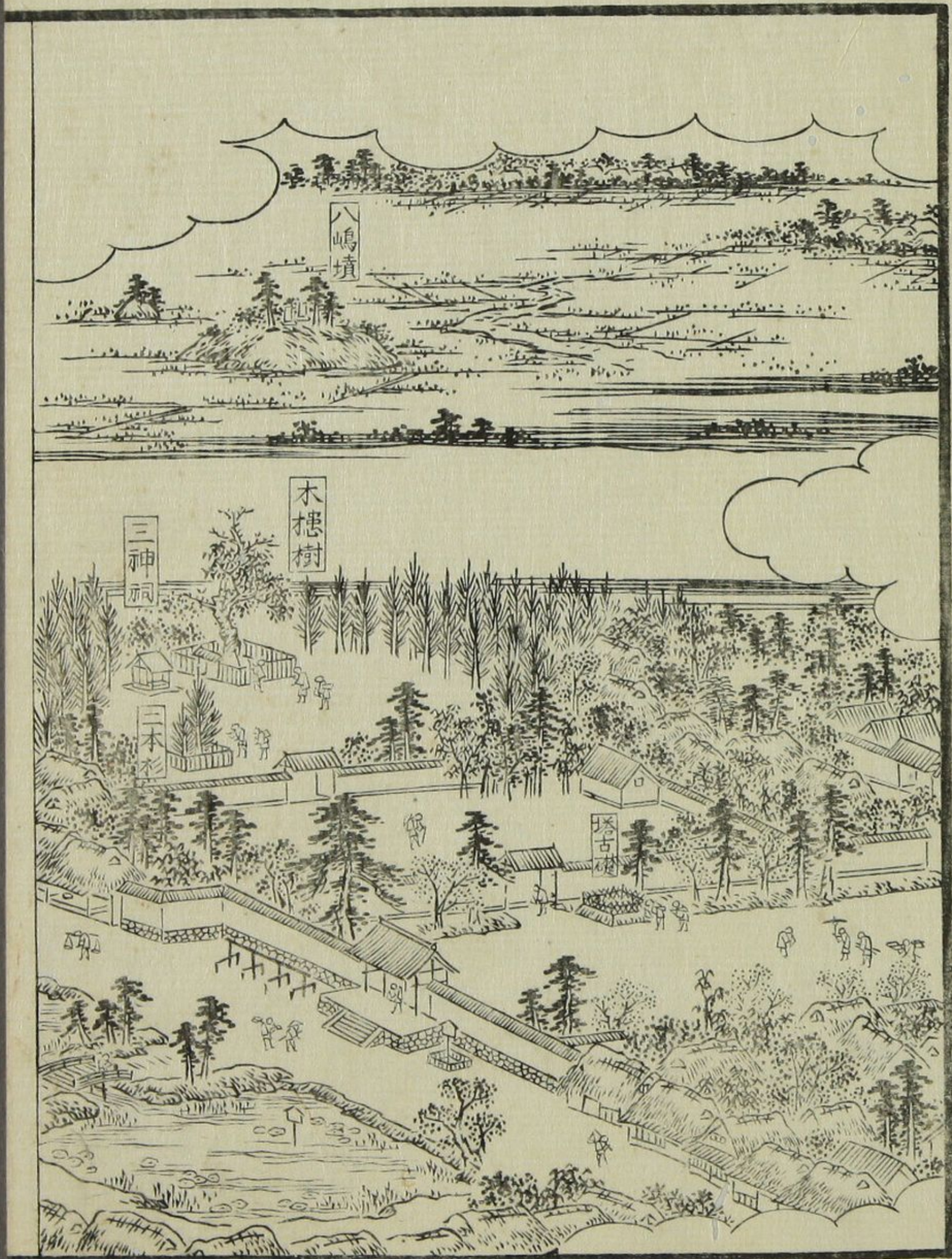
其二

本朝文粹大江国衛曰  
天滿自在天神或  
塩梅於天下輔導  
一人或日月於天  
上照臨萬民就中  
文道之大祖風月  
之本主也



平山

西五ノ二





**道明尼寺**

河内國志紀郡土師村あり土俗道明寺村と云真言律宗女僧寺職儀

**天満宮**

菅公御自作現存の神影と祭る 傳云一夜御製作世小荒木の天神と稱後後覺壽一後菅公筑紫一覽より後二十二年と歷て延長九年 帝哀惜りて左遷の宣言と捨て本宮小復され正二位と贈らるまこと月歩長崎路一へまゐりて安樂寺より御墓の石を移し御像を執使しつゝ末内一奉りて 帝の教覽へ奉りし憚りまゝて衆議の上にて本宮の御像を又筑紫より飯洛の石北野の聖曆一納奉られし言中甚是此まゝに之も聞傳ふ事此記に又菅公丞相はくく左遷のくく當寺に在り尙母御前の

寺説曰

鳴婆社別裳憂計連鳥乃音之無羅牟里濃曉裳蛾紫

今一至つて當村に於て鶏と畜ふ事と云

**鳥井額**

堅額正位大政大威徳天神と書け 寶鏡寺官理豊徳嚴皇女御筆

**幣殿額**

堅額天満大自在天神と書け 妙法院宮竟然法親王御筆

**十二面觀世音**

本堂に安置け 菅公御自作 長二尺許寺記云元慶四年當寺小わつて菅公

**試觀音**

長二尺許 菅公右の尊像と彫刻一の以前御試に作りし所と云

**釋迦牟尼佛**

本堂の中央に安置 長二尺許

**脇士**

文珠 普賢の兩尊と安置

**覺壽尼像**

本堂に安置 菅公御自作 妙善堂の御母君あり幼少より出塵の志ありて當寺の向名土師寺と号して氏の御前され當寺に於て出家す

**本堂額**

横額道明寺と書け 寶鏡寺官理豊比丘尼御筆

**寶藏**

釈迦堂の 後より

**藥師堂**

天満宮の東向の側より 本尊藥師佛八豐太閤政所の御念持佛 當寺に御寄附

**太子堂**

藥師堂の南より 聖徳太子二歳の像又十六歳の像と安置 佛二定朝の作

**妙善堂**

本堂の西の傍より 延命尊と安置 經藏 妙善堂の 傍より

**天徳日命社**

本堂の前西側より 菅家の祖神より牛頭天王婆羅笈女と祭る 當村の生土神として例祭九月廿二日

**鎮守**

紅梅殿 老松祠 白山権現 善女龍王 辨財天 愛宕権現 長賀明神 縮荷明神と祭る

**土師八島祠**

本社の東南より石とて作 祠之初天満宮の相殿より一が靈告を依て 中門の西客殿の前載より昔尙偶人と依り 古跡也

**土師竈跡**

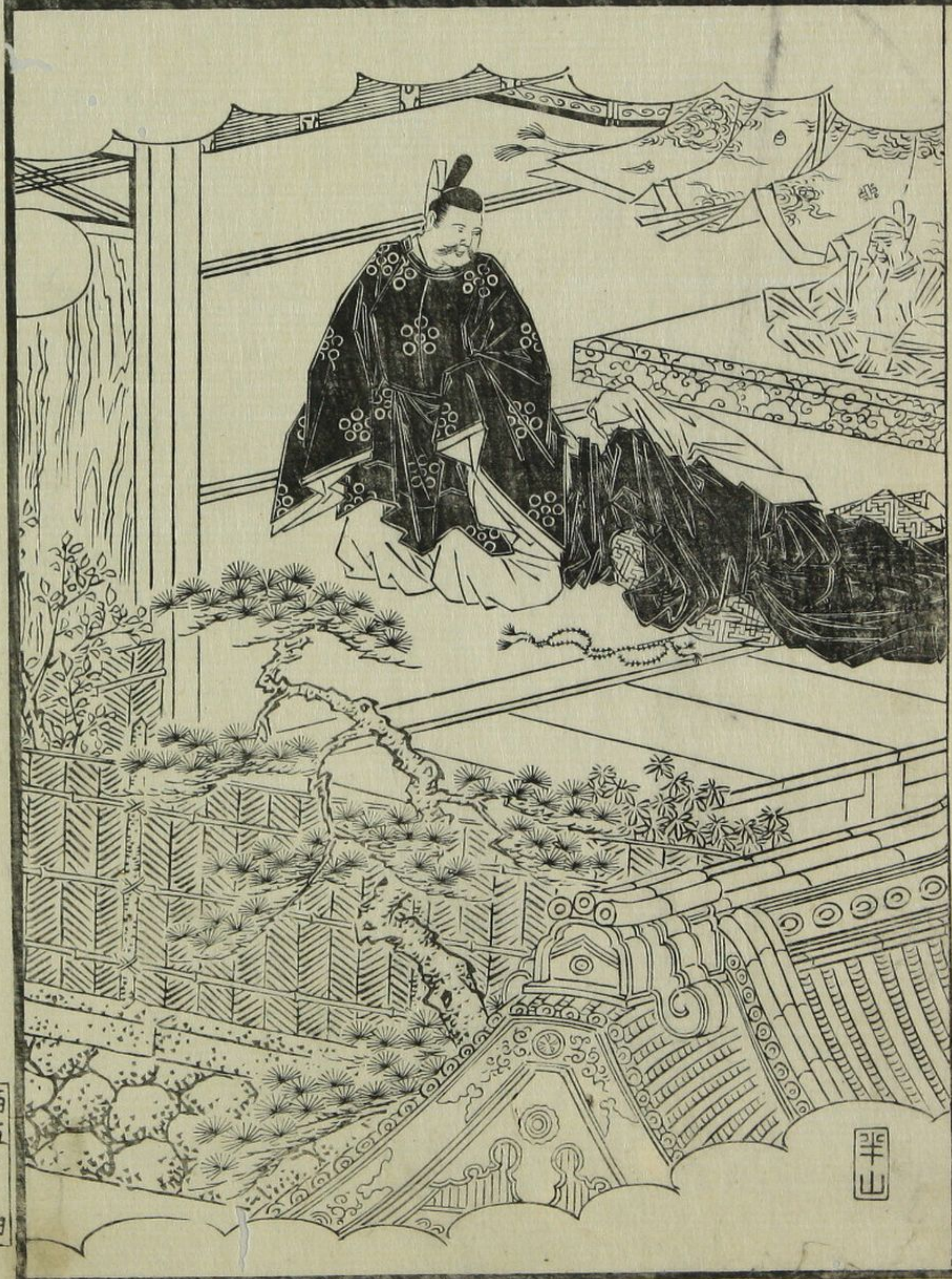
本社の東に遺す土師の跡あり 天照大神八幡宮春日明神と祭る

**三社神祠**

寺記云元慶八年菅公御自作の御時當時小わつて夏九旬の間五部の大衆經と書字のゆゑ忽然と天童二人來つて泉水と汲て硯注を丞相と云奇と尋らば我

白山稻荷の兩神より御經書寫の功德と守護ヤんとてその來現け菅公書寫と云事は終る







經美と納むる所と思惟しゆり又忽然として老僧香深の袈裟に水晶の念珠と持して現れ我ハ  
伊勢名清水春日の二神あり備堂の西の方と訓ころるの納むるに命其所とらちの  
石の裏あり即ちるまを藏りて埋伏し其塚より木槌生きて今盛んりて一説ハ聖徳太子  
五部の大業経と書写しゆり此の埋蔵しゆり何れ其是也と云ふ  
木槌靈樹 二社の神御の後より中頃如藍面緑の樹かかして枝葉ありて燒亡び根株のと  
二木杉 二社の前よりある経表と納りゆり生れ今より老松珠勝の靈木世のこ  
硯水 中門の腰より經書とらりゆり一時ろを汲せられ井水あり一名夏水井ゆり

塔古礎 壇内より入寺代の礎らり 向大夫祠 壇内より  
龍池 當寺の東より清泉四時増減なり作雨の時靈態あり又龍吟池と當寺の門前  
の蓮池と云ふ

當社天満宮の祖天徳日命より其苗裔 無仁天皇七年小出雲國野見  
宿禰とつる勇力の人より勅よりつて大和國に到つて當麻の飛速と力と競  
勝利と得て世に名輝いろまて日本角力の紀有るは又當時殉死と云ふ者  
多し 帝其是と哀しゆり野見の宿禰垣土と以て流偶人と製し以て  
殉死の代也 帝大に喜ぶせ給ひ宿禰が才智の功と賞とて野見と改めて  
土師の姓と賜ふ殿后 推古帝の御願よりつて上宮太子佛閣と建營し

給一時宿禰の後裔土師八島連が家を捨り積舎とあり是と道明寺と号し此  
八島連は我朝とて今様と楓い初一人うが其聲妙音とて鬼神も感とらるゆ  
籠の上より夜より異形の者来てて傳小奇ハ八島つづり思ひろをとれんそ  
夜更人静まつて時の調工と合せて楓いも亦其曲と云

銭宿のつづりか流流しきやたに名の四方はくをども  
其音聲の麗しと愛相の者感と堪もとや返奇也

是とこれよりこ反楓とて難波の方へ飛去ぬ太子の別号と豊邑と云ふ即其  
趣とて奏するは夏火里とて榮感皇とて南方に極て國土と守保星ありとて香  
ゆりとて其末孫土師宿禰古人同道長其居住の地名に依り菅原の姓と  
賜ふとて當寺ハ菅原の氏の寺とされ是善郷の御妹君もあり在り  
寛壽尼と号らせりゆり又返相も時々に來駕し給ふ然りて一説  
卷四年の春ゆりゆり紹りて左遷の御身とらせ給ふより御伯母



君小留別の御對面ありて筑紫太宰府遷らせり今後二年と歷て薨御すしは依て玲瓏なる宮殿を管贈大政大臣天満大自在天神宮と銘して奉幣ある其頃當道明寺も方之町の社の中社檀と建く左右梅を植く天満宮と崇りて往昔加蓋巍巍として嚴重なり土師村の外に稲葉美江の両村も寺産ありて元龜の頃古市高屋の城の兵亂の時没収せられ兵火に罹りて一時の煙とあり時天正年中官より命りて再興せ及び年々歳々神徳新々として遠近の諸人晴雨を論じて歩くと運ぶる間断を殊更例年二月廿五日會式とて御開齋ありせらるる時諸人群集して拜奉るるに群衆

神寶畧目

八葉御鏡 初封此御鏡天満宮御神體也往昔花園院の御宇延慶二年和州室生山にて傳授の由道明寺の八葉の鏡に我影を撰りて我に遇んと思ひ此鏡に向ふて然りたるを因て鈔阿奏遠して初封と下り

近年享保十二年靈元院帝中御門院帝 敬覽の時御如封あり  
天満宮楊枝神影 菅公八葉の鏡御神相と撰りて我に遇んと思ひ此鏡に向ふて然りたるを因て鈔阿奏遠して初封と下り

御硯 菅公四十歳の御時佛經を寫し給ふ白山縮荷の兩神現き水と運ばせり御硯あり

阿字鏡 寶劍 此二品菅公仁和二年又一夏に當寺におつて安居のついでに此神鏡小金にの夜神重現に神初らりて錦のやうなる寶劍を賜ふ

般若心經 阿弥陀經 二經ともに紺紙銀泥にて菅公自ら書寫し給ふ

石帶一角笏 櫛笏 中御櫛 鬘二筋あり

五股鈴 小刀劍 櫛鳥犀角 鬘菅公御所持

右二品菅公薨御の後御遺命に依て筑紫より覺壽尼に託紀念して贈りし所なり

瑠璃壺 筑前の國宇佐の辺の海濱にて龍女現れ奉りし品あり  
佛舍利 五粒 五色なり菅公奉りて尊敬し給ふ左遷のついで覺壽尼に置土産として進せし所なり

此外 奇品多しとも茲に畧す

名産楠 當寺坊中よりあつてのものを製し  
菅公廟碑 杖社の傍より母永四年乙未十二月六日丹北北山彰恭建

碑文畧し

内大臣正二位源朝臣前豐郷銘

平安江州綾拜撰

何曲合離謹書并篆額

碑文委々河内名所圖會出



土師八島墳

道明寺門前より西二丁余り田圃の中より高丘ありて石碑を建元文五年月

行足羽川

當志紀郡の東の郡界と云石川の向名より萬葉集一行足羽河の大橋と云り道明寺の

萬葉

見河内大橋獨去娘子歌一首并短歌

級照行足羽河之左丹塗大橋之上徒紅衣裳數十引山藍用

摺衣服而直獨伊渡為兒者若草乃夫香有良武櫃實之獨歎

將宿阿奉乃欲我妹之家乃不知

反歌

大橋之頭爾家有者心悲久獨去兒爾屋戶借申尾

當宗神社古跡

菅田村の北王水町より社司椋木氏の庭中に其標を存し

延喜式 當宗神社二座

並大月次

紀事曰

當宗社仁和四年四月始勸請云云

同内藏寮式曰 當宗祭 五色絶各六尺安藝木綿十二枚 曝布二丈 葉薦一枚 付木

二枝 賣幣仕丁、交易高布一段 記物忌料 緋綾六尺 西面九尺五寸 紫綾一丈二尺 紫

絹六尺 緋絹三丈五尺 緋四約綿十屯 神主料 絹一疋 絲一約 調布二端 記物 使儲幣 五色

當宗社

王水の井

當宗の神社

王水井の今廢

社司椋木氏の

老地を移るる

長按まゝありて一以て記の

神像の料を用ひて井にて

主ありて井と稱せし

主し王水と稱せし

王水乃井と稱せし

ありて水の名とせん

王水とい

ありて

後人

考に





木綿十二枚調布ニ丈付木ニ枝賣幣仕丁、交易高布一段記  
並、上酉祭之預前、裏備幣物杜本祭使便參

奉中行支秘抄 四月上酉日當宗氏祭事 午日使

寛平御記云仁和五年四月十四日乙亥。朕外祖又當宗氏神在河内国自今  
年可祭始之状仰畢。又世記云寛平五年四月七日戊辰是日始奉遣河内國  
志紀郡當宗氏神祭幣帛使國司一人專當其支使食薑等並用國正統  
永為恒例當宗社天皇外祖母之氏神也云

公事根源云 當宗祭 上酉日

是ハ河内國に侍る神社あり午日使之杜本當宗ハ程ちろき故獨のつひ  
兩社の祭のころ下向の宇多御門の御外祖又當宗氏ありと仁和五年四月  
十四日に祭とて行はる

浅深秘抄下卷云

寛平法皇御外祖母氏神在河内國所謂當宗社也仍  
自仁和五年被祭之或説云實御母儀中野親王女斑  
子女王云

當宗氏 新撰姓氏錄云 當宗忌寸出自後漢獻帝四  
世孫山陽公後也

河内国名所國會ニ代實錄云 寛平五年四月七日始遣河内國志紀郡當宗社神祭  
幣帛使云云云云ニ代實錄ハ和陽成光孝の二帝の御代ニ記々天女二年八月より云々  
仁和二年八月に終まり仁和四年宇多天皇即位より同五年寛平と改えり愚按るハ  
續ニ代實錄の續字の脱やあらず本朝書籍目錄新國史四十卷よりハ統ニ代實錄と号す云  
新國史ハ宇多醍醐朱雀の三朝ニ録し聞とも今ハ断絶の書ありと史籍年表に見たり

### 長野山畧田八幡宮

古布郡畧田村あり僧院十五宇神子五人勅願所毎半  
正月十九日社僧泰内御祈禱の奉數と捧奉る

本社 祭神 中央 德神天皇 左 仲哀天皇 任吉大神 右 神功皇后 一坐 神祕以上 五坐 依  
併せて畧田八幡宮と稱し奉依

權殿 北の方あり 末社 南の方 武内臣 向山権現 熊野権現  
瑞籬の外側ニ下の高良社ありと云々武内宿禰と云々

東の方天神七代の社其外幣殿拜殿舞臺あり南方繪島殿神樂所御供所あり

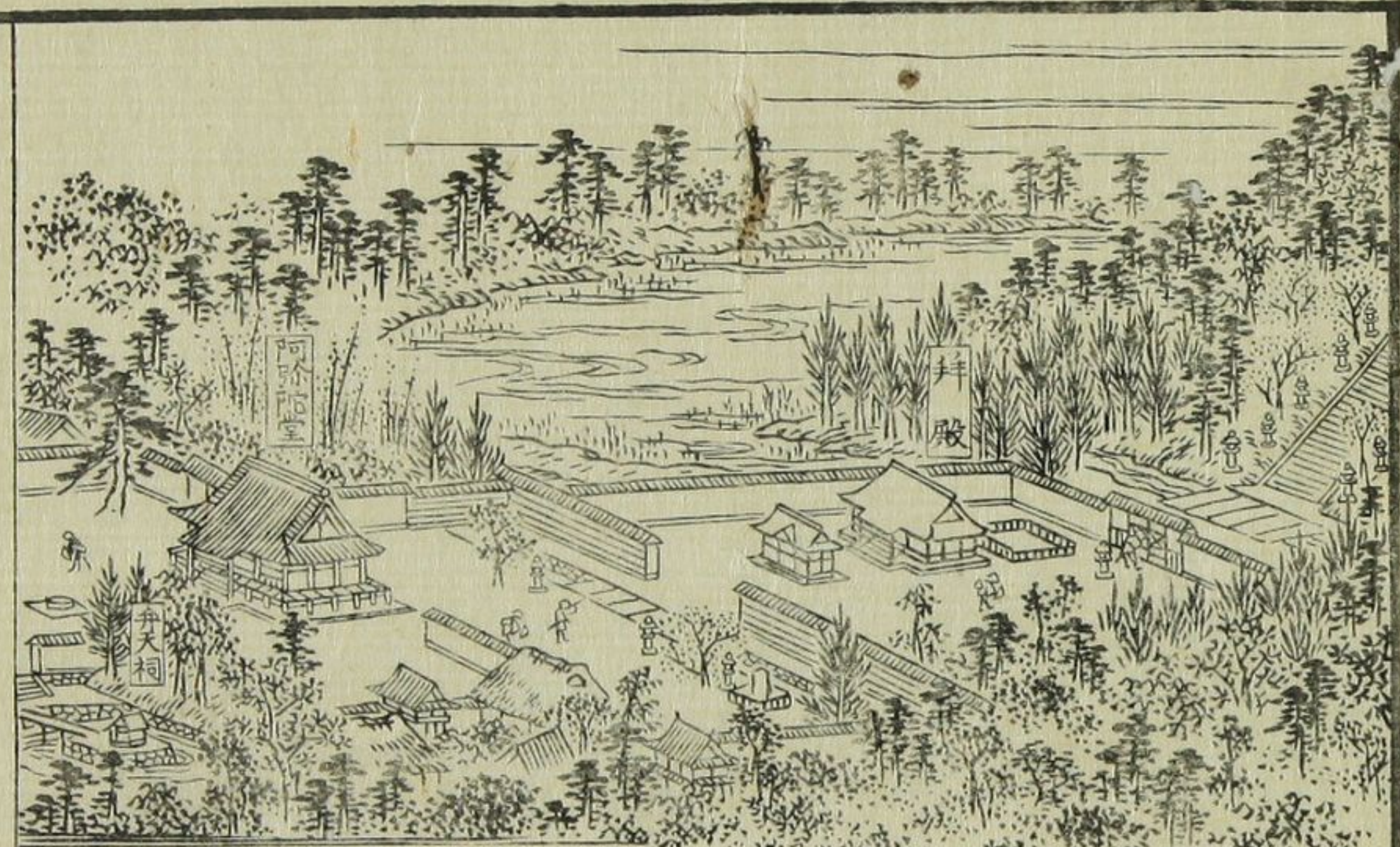
本地堂 護國寺と号し本社に向ふ左側あり本尊阿弥陀佛と安置し定朝作  
長座像五又開基弘法大師 當院 真言宗

觀音堂 聖德太子御作十一面觀世音と 十二層石塔婆 弘法大師造立也今僅存  
安の長三尺五寸 地車藏の前あり

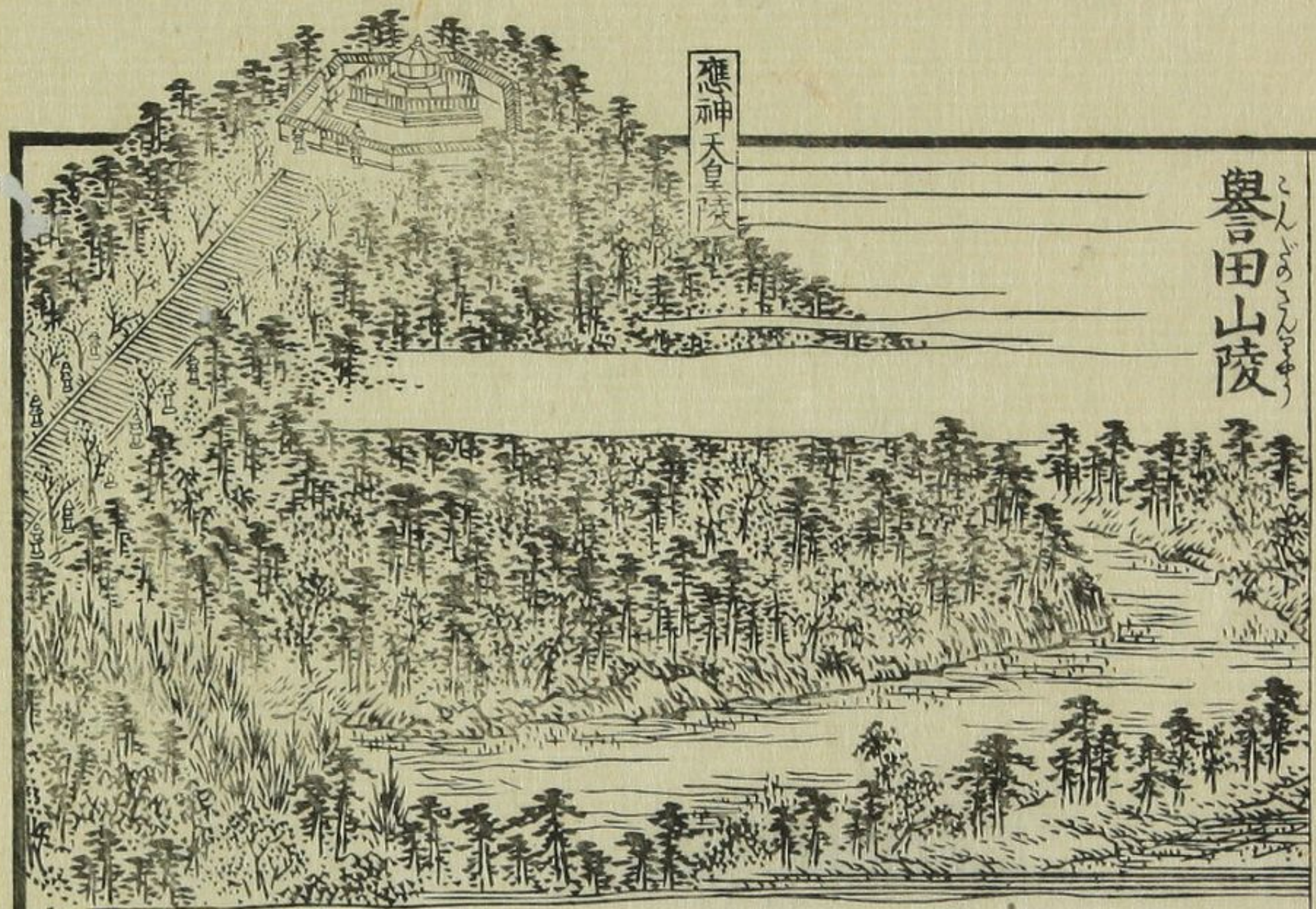
奥院 室蓮華寺と号し伽藍 阿弥陀堂 定朝作の阿弥陀佛と安置

辨財天祠 東の方地の中嶋あり 石及槁 奥院の門前あり  
弘法大師勧進と云



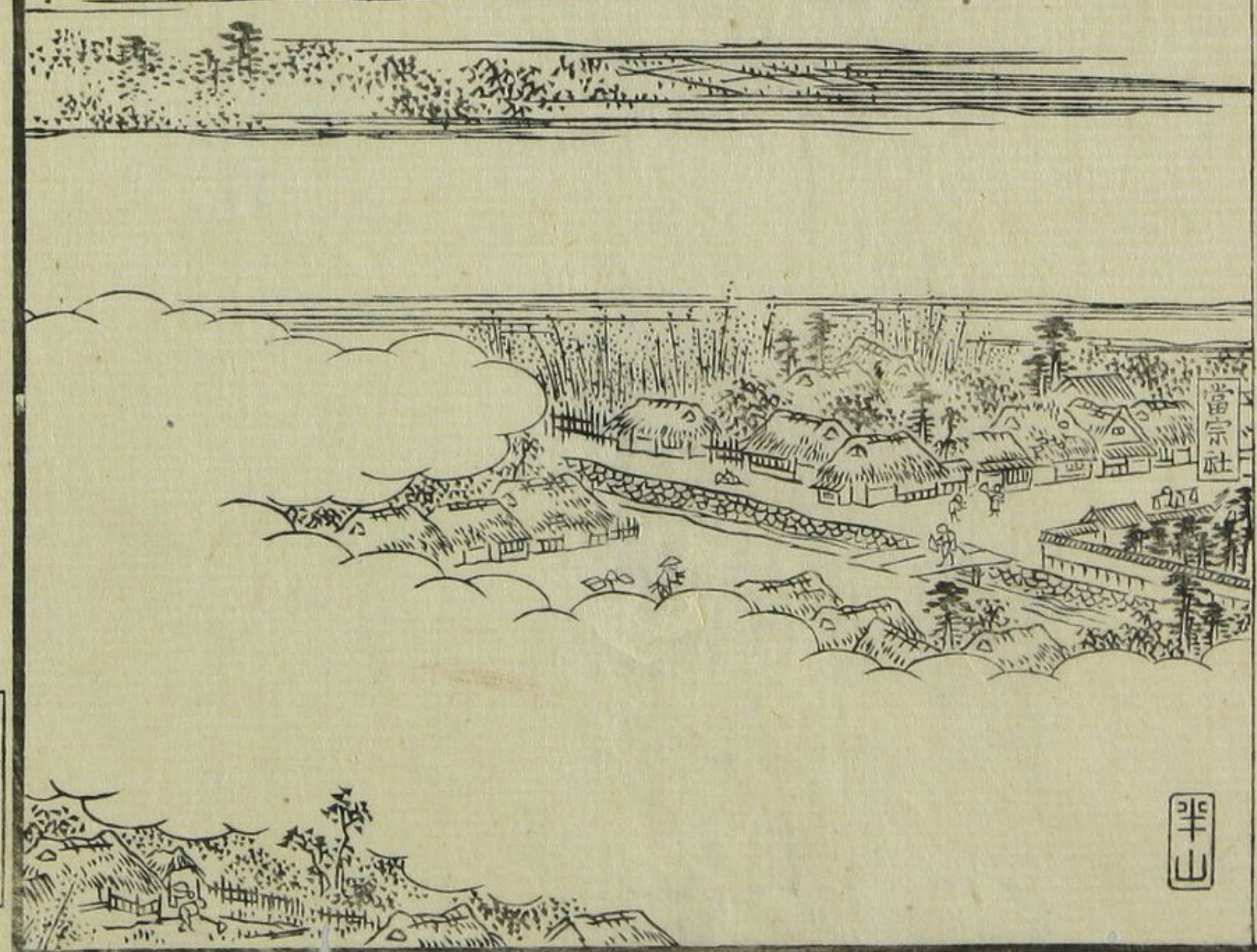


安葬令義解曰  
帝王墳墓如山  
如陵故謂之  
山陵云



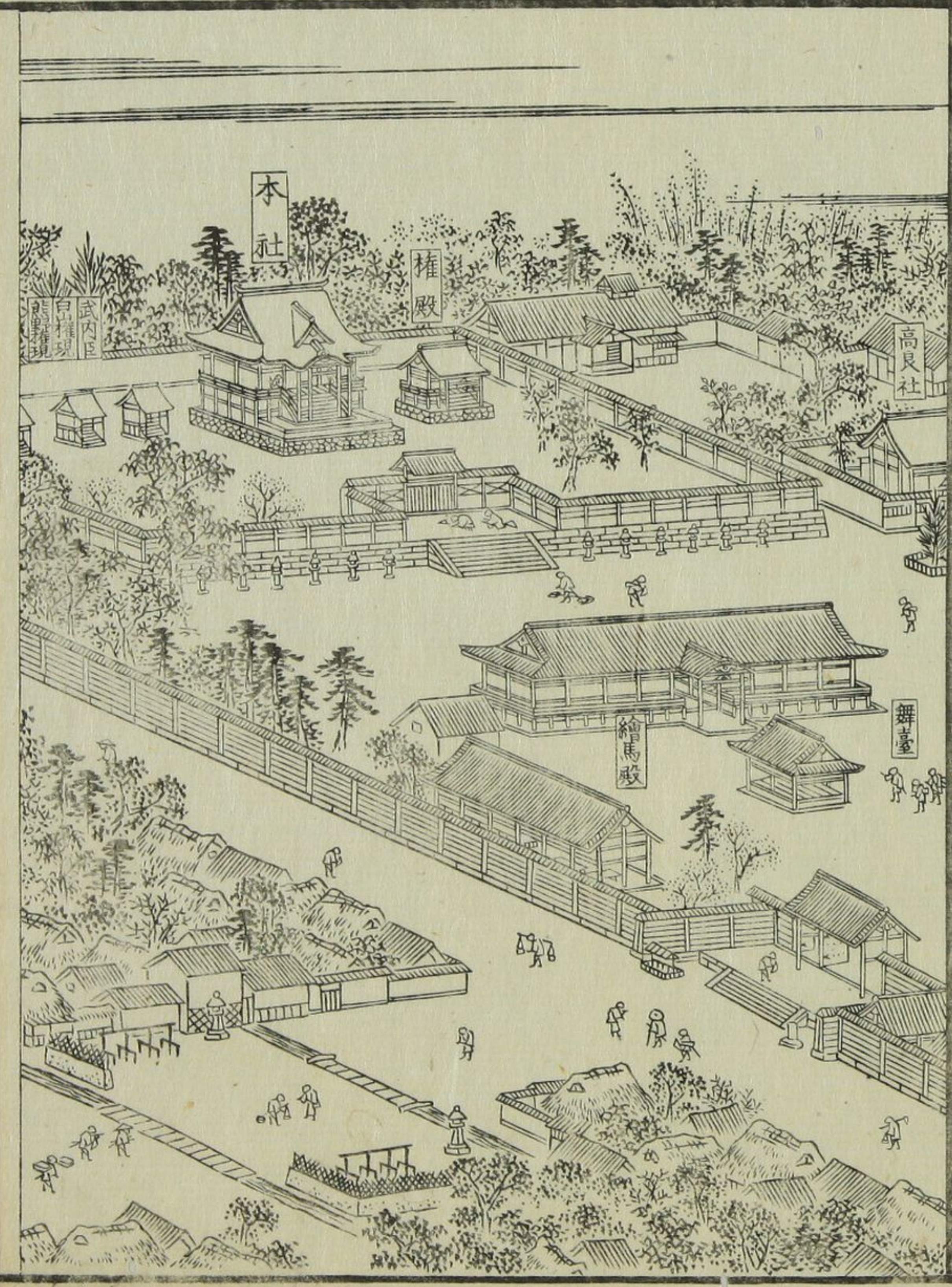
譽田山陵

應神天皇陵

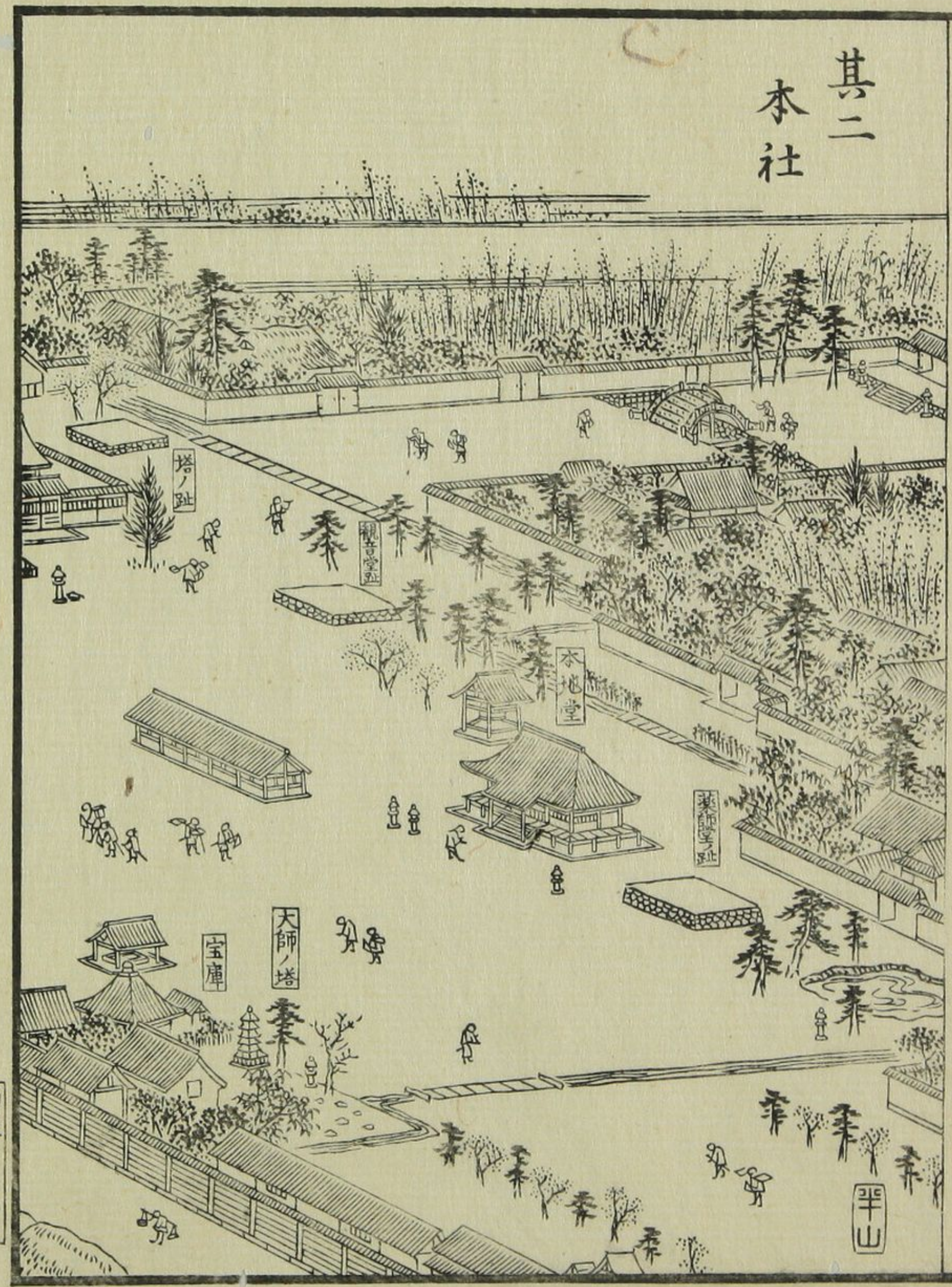


半山





其二  
本社





蛇文字石 其趾の石のよみ血の跡と傳へ其故其名あり土人其を  
二月 關伽井 關伽井の跡あり大祈雨修法のとき香水の今今つて病者は服す  
龍池 大師祈雨の時此池に善女龍王と勸請し今も旱天に此池と祈るはか  
靈驗ありと傳へ

應神天皇陵

惠我薄伏山岡陵跡に御廟陵は志紀郡御社古市郡ありト云陵上は六角  
基の下に宣命場中門あり是より雜人陵上へ登る事と傳へりやうて昇るとはか  
神の崇り四面に古松繁茂し赤土壺山陵に多く埋り蓋しは殉死の代りて官人の名を  
とる此壺埋む一徳ハあそと土破留の壺とあり此壺に雨水と湛て山陵の崩さざる用意  
といふ周凡七百二十余間陵の周凡八十八間并ト云

前王廟陵記云

惠我薄伏山岡陵輕嶋明宮御宇應神天皇在河内國志紀郡  
北域東西五町南北五町陵戸二烟守戸二烟 延喜諸陵式

日本紀云

譽田天皇神應足仲彥天皇仲第四子也母曰氣長足姬尊神功  
天皇以皇后討新羅之年歲次辰冬十二月生於筑紫之紋田  
幼而聰達玄監深遠勳客進士聖表有異焉皇太后攝政之

年三為皇太子時年初天皇在孕而天神地祇授之韓既產之完  
生腕上其形如靴是皇太后為雄裝之負靴故稱其名謂譽田  
天皇事同四十一年春二月甲午朔戊申天皇崩明宮時年一  
百一十歲一云崩于大隅宮  
傳云初帝胎肉在左の時先帝崩トて継子あり此帝帝王の正統ト云  
よ時人胎中天皇し歸り且産ま給ひて腕の肉高く上りて其形靴と負りつ  
と故に其名と稱トて譽田天皇ト云靴ト以て譽田ト呼ぶ故に斯言ト云  
右靴の形製作は軍器考日本古義ト云見ト云るト云

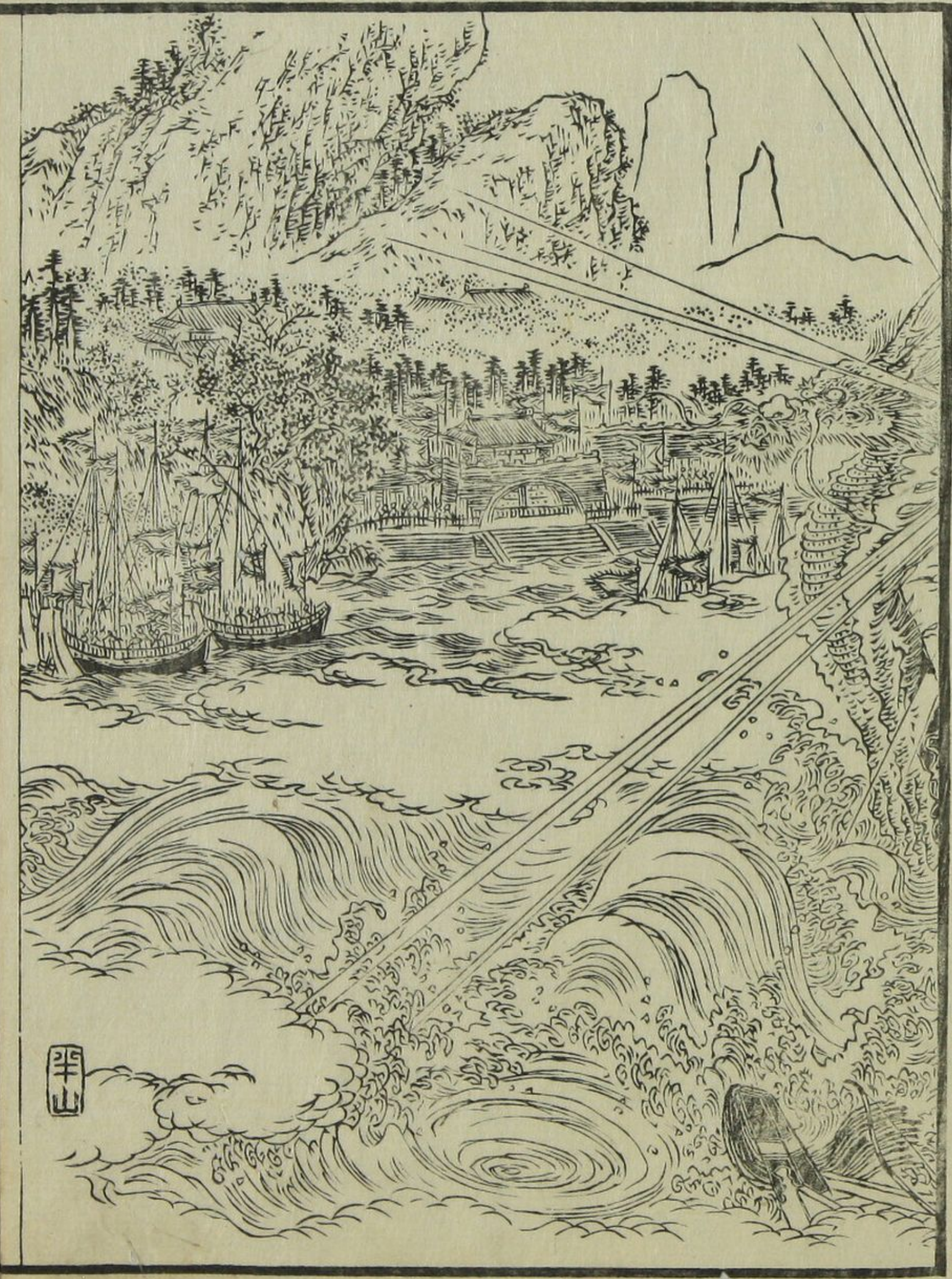
夫此山陵ハ人皇十六代の帝應神天皇の玉體と蔵り奉依所なり  
天皇大和國高市郡擲原輕島豐明宮に皇居し給ひ御在位四十一年聖壽百  
十歳トて同御宇四十一年の春二月十五日崩り御遺詔トて長野の山陵  
に蔵奉依此御父仲哀天皇の御宇に韓より數百萬騎トて本朝へ攻来る  
天皇神五萬騎ト引率トて穴戸國豊浦宮に赴き異賊退治の軍議トて韓  
の大將羅輪トて者里雲ト乗トて日本へ渡り人民ト殺し事數トて其  
帝安倍高九介丸ト從トて武内の臣ト副將トて自ら御弓と取箭伐劍ト



射せ給へば忽ち塵輪ハ首と射斬まて亡びたり其毒氣玉體小恙ありて  
御壽も危う皇妃神の皇后と勅して曰く汝大將軍として異國と追討す  
胎肉小姓ハ太子おれ降誕の後正しく寶祚即て遺詔つて同御  
宇九年二月六日聖算五十二歳して筑紫樞日宮にて崩の皇后此旨に任  
て韓退治のあり數万の軍勢と卒て異邦に赴きの其時白髪の老翁來て  
皇后に御伴は斯て門司關と過て香推の濱といふ所に着せの彼老翁は  
る鹿島といふ安曇磯良と申者なり海中より一棹で案内し知る者おれ  
彼を召て龍宮に遣し干珠満珠の兩顆を龍王に得ぬ是を以て韓追討は  
勝利疑ひなく奏し皇后諾し然る磯良は何して召さるや我云  
此童青海波と申舞臺と持て愛し海上一舞臺と構て舞りめり  
磯良速に來るべ即ち供奉の人を以音樂と奏させ翁舞の磯良與小  
乗して來依久し海中小在るも鳥ハ鰐蛇あひひり取付く淨衣乃  
袖顔と覆ひ龜のつて來る其より磯良案内者として皇后の御妹

豊姫と使して遣はされも龍王より彼兩顆と捧られり皇后即時に四十  
八艘の軍船と艦し異域に渡り敵船ちり漕せさせ先干珠茂海上  
投入る漫く依潮水るの寶珠不入り陸路の二韓の軍勢何の  
思慮もろく悉く船とちりて和船と目かけて切て依其間敵船と奪い  
とつて相圖とりつて満珠と海上投入る潮水入り信して四方より  
涌つて二韓の軍勢一個も残らぬ溺れ死に異國と安く滅び給は彼國  
日本國小從ひて永く年々調貢と奉る即ち此老翁は住吉明神と地神  
五代鸚鵡草菅不合尊の御事なり又磯良と申常陸の鹿嶋明神大和  
春日明神と号武麿槌命なり皇后筑紫小御凱陣あり十二月四日  
日應神天皇降誕の故に今於て外の日と縁日といふ仲哀天皇の嫡后大  
仲姫の皇子薺坂忍熊の二王子皇后と戮さんと待けける武内の臣太子成  
抱き奉て南海より紀伊國に到り彼二王子は皇后むくひて安くと滅ぶ  
羣臣皇后と尊んで皇太后といふ年と改めて攝政元年は攝政と二十





平山



三韓  
征伐

三韓征伐



九年聖壽二百歳して大和國高市郡磐余雅接宮して崩ゆ人皇子八歳の御時皇太子小立せゆい御年七十一歳と申す帝位小備王 應神天皇と申奉る 仲哀帝第四の皇子あり治世四十一年妃八人男女の御子十九人誕生せしゆ此御代より下りて文字より衣裳と織縫よりと始まる  
一 輕島豐明宮して崩ゆい遂に當山に蔵し奉る 厥后 欽明天皇御年二十年二月十五日行幸ありて一七日泰籠の一人即ち八幡宮神射と現じ天皇は純宜より又聖德太子十六歳の御時守屋退治のころ七日泰籠靈驗より朝敵と七の一人役小角も又入唐の祈願し文武帝大寶元年四月八日より一七日泰籠の夜に崑崙の玉も磨ぎ珠ありて蓬萊の薬も嘗ぎれば益ありと示現の又僧正行基も此の籠にて元明帝の詔より多て四十九院を成就し又弘法大師も天長三年四月十五日吉市郷西琳寺より一夏の間に二詣りて二密の觀念とありて二理坐禪の形も明あんとする 曉ぐて僧形老体して手錫杖とつれて迦陵の

御聲鮮は大師小告く曰く

歸命金剛秘密佛 靈智令法久住世  
為度末世諸衆生 世間出世利群生  
大師答へて曰

誓主八階大菩薩 示現神通度衆生  
斷除十惡為十善 覆護衆生能與樂

天長四年天下大旱魃は淳和帝の詔を蒙りて六月朔日より一七日前雨の修法より忽ち善女龍王八大竜神現じ膏雨霏り仁和二年管丞相道明寺に赴きり時當社に系籠りて神童一人社擅より現りれ寶劍と授けり今筑紫安樂寺に傳へりて其後 後冷泉院の御宇示現ありて御廟前の宮殿を改め南へ去あて一町許より嚴重御修補し給ひ大いふ美麗莊嚴の宮殿となり又毎歲十二月吉日と撰て諸の山陵へ荷前の官幣と奉らりて事延喜式公事根源より見へり右大将頼朝卿



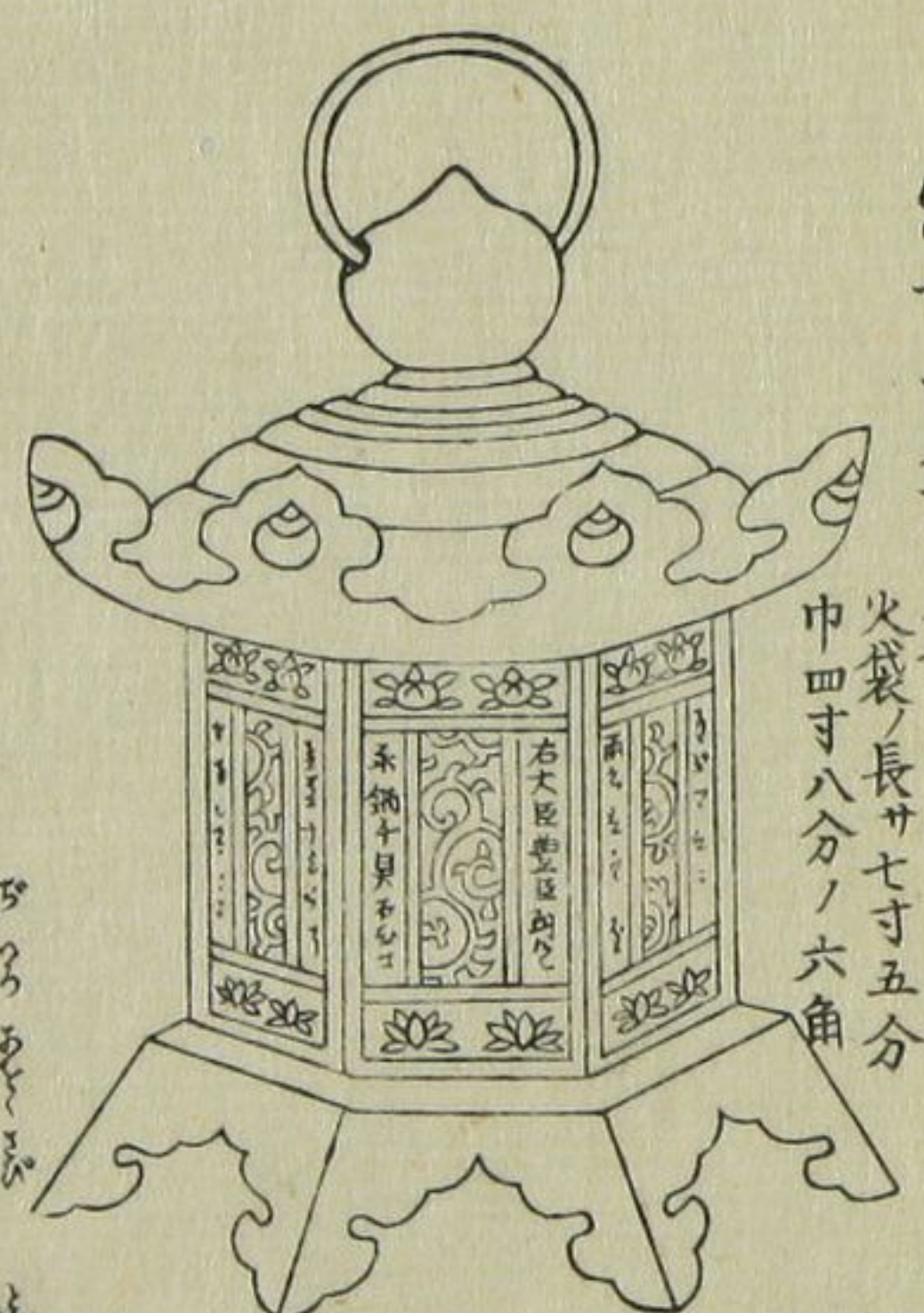
建久七年小社頭如藍新造管つて神領方四十町と定めり北條九代  
 足利十五代相續り頼朝の舊例に任ぜり後頼朝の御宸翰より  
 縁起り永享五年孟夏廿一日征夷大將軍左大臣兼右近衛大將足利義教公  
 の墨蹟より再土佐將監光信より以上社傳或は愚童訓星霜移り東海の  
 三つに桑田とあり習ひ天正の頃平信長朝臣四十町の神領と悉く没収せり  
 豊大岡の御時貳百石の喜捨あり其後將軍家國初の御時山年貢未御寄附  
 り委り社説不見へればる畧り今境地方五町代々將軍家御朱印の社領有  
 ○當社四時の神事

正月十四日 今夜月影とけく曲物水と入扱目とり年中の水斗何合と知  
 是祿宜の役なり 二月初卯日種々の神供と捧ぐ作法あり  
 四月八日 若宮の例祭より檀輦二輛りつの上は造花とめぐる笛太鼓鉦とを中  
 音楽の真似あり三韓退治の吉例より日本車樂の始とつり其製より古雅  
 隔年より一ヶ年の猿樂あり大夫難方南都より来り勤む  
 放生會 例年八月八日より神式始り十四日寅刻は神樂と奥院へ神幸り近村生土  
 の人々灯と上げ奉る事星のてり翌十五日午の刻本社に還り奉る

神供ありしや神祕の祭式嚴あり社人の守護なり神子の神樂と奏  
 舞樂ありしが寛文年間より中絶し及ぶと云  
 十一月初卯日宵宮より御湯と捧ぐ是神祕の祭式ありしや  
 十二月十四日降誕日とつり御神事あり産舎と鴉の羽とて作る故は卯の日と縁日と  
 奥院鈎燈爐之圖 阿跡陀堂の前は掛り所は先年詣りて摸写し置る者あり  
 然る今今年再び詣りて見れば密庫に秘藏ありしや

銘云 惣長一尺七寸八分余  
 火袋長七寸五分  
 中四寸八分六角

奥院本堂之寶前  
 掛這燈籠 中畧  
 譽田八幡聖廟  
 再興之次辱  
 右大臣豊臣朝臣秀頼公  
 永銷千具万禱者也  
 慶長十七己十二月吉且 斤桐東市正且元奉梅云



○地色青銷り所々金色と  
 傳ふれども余は真鍮なり



奥院羯鼓胴木口

洞繪牡丹花 朱胡粉綠青赤彩色

同莖雲水彫物極彩色

正中 高サ六寸許

厚サ壹寸

莖ノ繫凡五寸

惣徑五寸四分

奥院鐘

鑄ノ日

八幡宮

譽田山陵鐘也

建久七年 丙七月日

鑄之

建久七年八月廿二代後鳥羽院ノ御宇也

嘉永元年戊申三月六百五十二年ニ及ブ



譽田宮神寶

額 後冷泉院 當社傳記

鳳輦 右大將賴朝郷寄附

釣鏡 以上四種建久七年當社

神鏡 瓶子 以上往古ノ傳ノ神器トス

納曾利面 聖徳太子作

書狀數通 豊臣秀吉公

雪月花一軸 大樹家先公

貴徳一面 傳信貴山

還城樂一百 傳信法橋圓信作

翁面乙御前画ニ箇月面

百馬画 趙子昂

長刀 頼朝郷寄附ニ條小鍛冶

御弓 御矢 御劍 御鉾 琴 琵琶

神馬鞍 頼朝郷寄進

太刀 栗田口藤馬允

大太鼓 庭幡 龍頭 足利十代義植公寄附

堆朱器 秀忠公御寄附

山姫面 同郷寄附

散手一面 二舞 二面

陵王一面 退走徳一面

退宿徳四面 内二面八律師浄真作

鷲繪 徽宗皇帝

軍鑑大星 漢家鼻鳳本朝

鐘馗 元朝顏輝

白井秘法



神功皇后尊影 酒井隼人 應神天皇 法橋住吉 太刀 永井伊賀守大江 朝臣尚富寄附

五色鏡 水晶三角玉 硯一面 号明亭石 花器一瓶 号斑雲

青磁香爐 号薄雲 組盆 号玉鳥 堆朱香合 号扇輪 龍文錢 和銅珎開

新圖縁起 五卷 大橋重政 歌仙歌 尊道親王 大自在王菩薩影 宣海自

佛舍利 青色一粒八祖相兼 五鈷二鈷獨鈷 弘法大師 阿浮檀金如意輪 長寸

般若經 弘法大師筆 紺紙金泥法華經 天満天神 愛深明王 弘法大師

三尊種子曼荼羅 中將姫織物 不動明王 智燈大師 西界曼荼羅 理源大

釈迦羅漢 宋朝僧 月達筆 湿槃像 古法眼 弘法大師影 真如親王御筆

奥院寶器

大自在王菩薩尊影 聖德太子 佛舍利一粒 叙尊 十六善神 弘法大

興正菩薩影 自作 十六羅漢 任僧教也 書翰二通 尊氏公 秀吉公ホ也

長峰八幡宮 譽田の本社より南二町より大和より御鳳筆と云ぐ此より夫より陵は

日本紀曰 雄略天皇九年秋七月壬辰朔河内國言飛鳥戸郡人田邊史伯

孫女者古市郡人書首加龍之妻也伯孫聞女産兒往賀賀家而

月夜還於蓬萊丘譽田陵下逢騎赤駿者其馬時灌略而龍藉欲

聳擢而鳴驚異體峰生殊相逸發伯孫就視而心欲之乃鞭行乘

駿馬奔頭並善雨乃赤駿超摠絶於塵轍驅驚迅於滅後於是駢

馬後而怠足不可復追其乘駿者知伯孫所欲仍停換馬相辭取

別伯孫得駿甚歡驟而入廐解鞍秣馬眠之其明且赤駿竟為土

馬伯孫心異之還覓譽田陵乃見駢馬在於土馬之間取代而置

所換土馬 社頭古跡の内小神馬舎の跡と云此土馬と納りて存あり

市蛭子 東門の傍小 御神塚 本社より良の方より傳云當宗の神社の神主

不動石 御神塚の 小野道風故居 不動石の傍 二冢山 御陵の東より

栗冢山 二冢山の 放生川 奥院及橋 善法寺跡 放生川の 矢坂山 陵の北

御旅行影向松 陵の西南池の 後冷泉院行宮址 今新町



名物喜鷹鈴

當喜田の名産なり  
和漢二才図會云河州喜田鍛工市口明珍二氏善作銜鑿

長野山

一名篠伏山喜田碓井土師より志紀郡多かりし廟陵式出

譽田壘

譽田村あり足利方河内守移浦入道より居り  
南朝楠正儀攻寄てこもりし所

伊岐宮

譽田村の南五町古市村あり日本武尊の靈を祀り白鳥明神と稱す  
此所の生主神といふ例祭六月十二日九月九日二度あり

日本武尊八人皇十二代景行天皇第六の皇子あり身長一丈武勇俊傑して  
西戎を伐ち東夷伐平らぐ天皇四十二年東征より返つて勢州能褒野に  
薨び能褒野の陵に葬る然るに其神白鳥と化して出づ倭國に飛ぶ群臣  
棺を開ひくろきを見る小空しく明て衣とくむ白鳥大和の琴禰の原に停  
るよりて陵と此所を造る白鳥又飛んで河内に至り古市の邑に留まると  
陵は造らば故に二陵とも白鳥の陵といふ日本書紀不見

向原山西琳寺

古市村あり初に向原寺といふ後改りて西林寺とも書はれ云  
真言宗南都西大寺属り本堂南面

本尊 釋迦牟尼佛

百濟國聖明王將來赤檜檀木天竺毘前羯磨の作  
長五尺二步版土降三世明王不動明王弘法大師作

船先觀世音

船字檀金十一面觀世音長三尺三寸百濟國聖明王日本(渡海の時船中)  
守護のより船に安置し風波の災いなく安穩に渡海あると數り今も

渡海の人御念をれ其難をすくせ  
ゆへ事靈驗ありとあり云

地藏尊

本堂に安置し菅菴桐の御作 長二尺二寸世ふつとりの地藏云

觀音堂

本堂の東より安阿弥の作の聖觀音と安ん  
座像 長三尺一寸 鐘樓 本堂の右の前あり

塔礎

本堂の東あり真樹の古礎に和の字と鐫り 其周十六礎あり

明星水

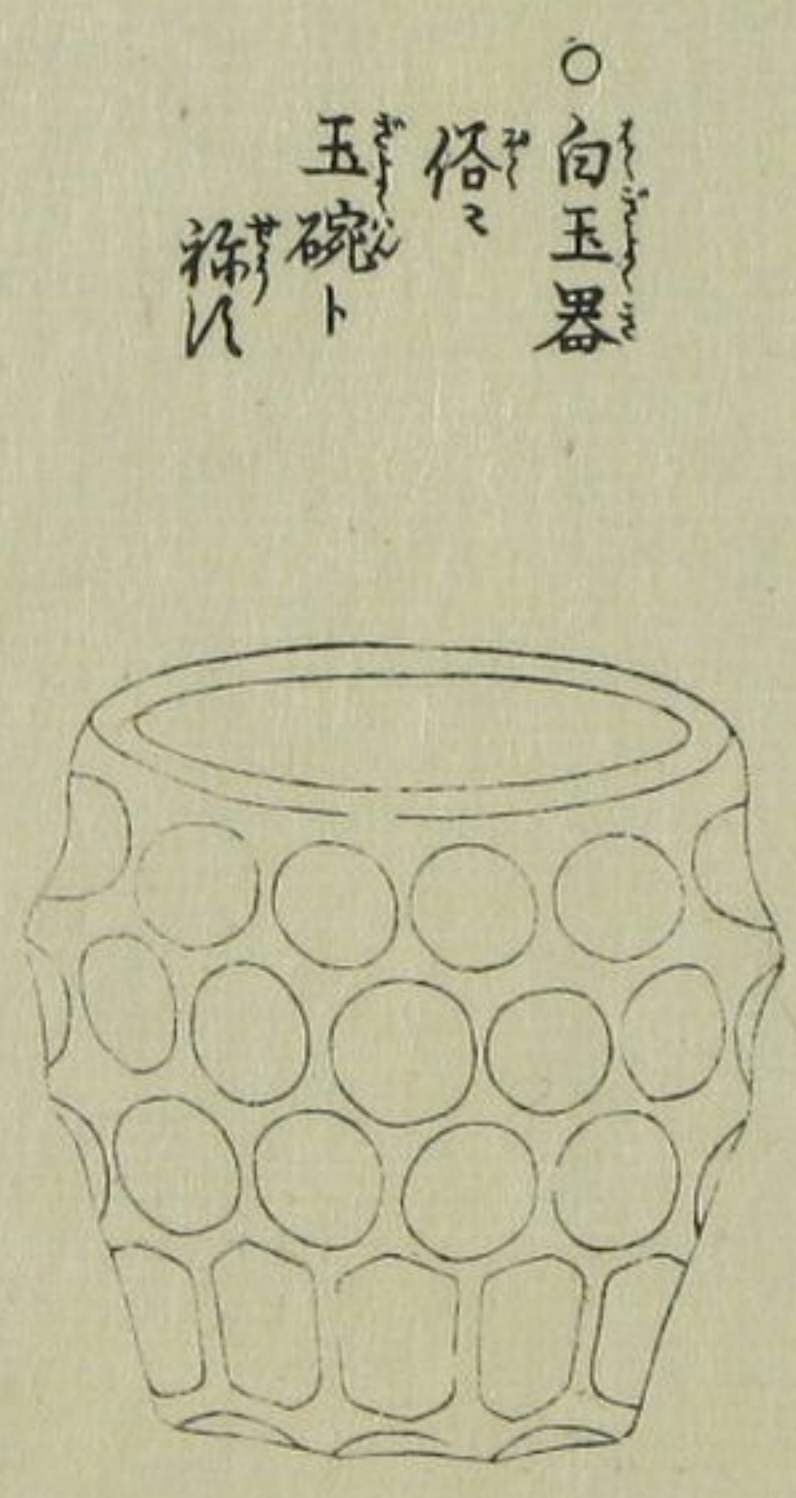
觀音堂の良より 龍池 南の方にけり傍に龍王の祠あり  
清泉清冷なり

人王二十代欽明天皇十二年冬十月百濟國聖明王釈迦の金像幡蓋經論若  
干を將來より 帝一献して曰夫佛法を申し諸法の中は最殊勝の道として  
周公孔子も真意を悟る事能はば善群生を利し徳無量なり初め  
天皇より出て震旦を流通して韓も又尊崇り 天皇おきて叡聞有て  
即ち歡喜踊躍し如是微妙の法を朕の心も曾々聞ひ侍臣獲我大臣  
稱目宿祢奏達して云今西蕃の諸邦より是を致し我朝獨り豈是  
に替らん哉と 帝一同意し奉まば其時物部大連尾蕨中臣連鎌子  
儀奏して曰それ 我國家の天下は天神地祇百八十神と四時二拜祭



して守護人代に逮んども一千有餘年異國の法を修せりて國家清平  
 たる事萬國に勝る今更西蕃の神を拜祭しめり恐らくは我國神の怒  
 りを遮て奏達しられ天皇佛像を福目宿禰に賜ふ藉我大臣忻悦  
 して小墾田家に安置し其後向原の館を寺と名けて向原寺と号し  
 奉歲積りて四十五代 聖武天皇の御宇西大寺の監真和尚を修補し又  
 弘法大師もふ止棲しめり余後建長六年の春又西大寺興正菩薩再興  
 して律宗の淨刹と名けり昔日封境廣大して七堂伽藍僧坊魏寺産  
 世六町あり則ち舊圖に詳りたり然つて中古騷擾の患ひに罹て今の如く精舎  
 とある去程に寺に弘安四年の大政官符あり又興國年中の國宣數章弘  
 安應永年間將軍家の願文永年中の流記數通と蔵其外數種有爰に畧  
 玉碗 一 當山の什寶也 亘四寸 高二寸八歩 内深二寸二分  
 周り底一面一星のて圓形連る其玉性分明あり是は今より凡百五十年より以前洪水  
 の時 安閑天皇の陵土砂を落て其中より朱ありて出たりしと出るとりたり  
 其地は村中田中何某の農家の持地あり斯て當寺に蔵むるなり

安閑天皇の陵は古市の南高屋より  
 人王二十代の帝あり  
 前王廟陵記云  
 古市高屋丘陵勾金橋宮  
 御宇安閑天皇在河内国  
 古市郡云々  
 或曰近年土民發陵得古代器物等  
 此玉碗の事あり



船氏墓誌 當寺の什物  
 銅牌 長九寸七分 闊二寸二分 厚五厘  
 其面背とも小文を鑄り面の方左の通  
 圓點五層 上四層數凡七十六箇  
 一周各十九箇也  
 第五層一周七箇形大之

惟船氏故王後首者是船氏中祖王智仁首兒 那沛故  
 首之子也生於乎婆陁宮治天下 天皇之世奉仕於等由  
 羅官 治天下 天皇之朝至於阿須迦宮治天下 天皇之  
 朝 天皇照見知其才異仕有功勳 勅賜官位大仁品為第



同背、鑄る所左の如し

三頭山於阿須迦 天皇之未歲次辛丑十二月二日庚寅故  
戊辰年十二月殞葬於松岳山上共婦安埋故能刀自  
同墓其大兄乃羅古首之墓並作墓也即為安保万  
代之靈基牢固永劫之寶地也

### 安閑天皇陵

右牌文の注好古小録 藤井貞幹著 金吾志 西直養著 等小洋丸の畧之  
高屋にあり右の山陵あり  
天皇の御宮 神前皇女と此の合葬し奉るト云

#### 安閑紀曰

勾大兄廣國押武金日天皇安閑男大遼天皇  
長子也母曰目子媛是天皇為人墻宇凝峻不可得窺桓  
桓寬大有人君之量中畧

二年冬十二月天皇崩于勾金橋宮時年七十是月葬天  
皇于河内舊市高屋丘陵以皇后春日山田皇女及天皇  
妹神前皇女合葬于是陵

### 春日山田皇女墓

右陵の南に隣る古市高屋墓より此皇女、仁賢天皇の女なり  
安閑帝の皇后なり又の名を山田赤見皇女と云

### 高屋神社

古市古屋敷村あり 延喜式、出今八幡山より古市郡二座の其二也  
葦王権現の祠あり

### 高屋古城

安閑帝の陵の北より東西十八間南北二十一間墟址の石像の不動明王を安置  
其後家臣遊佐安見木澤守義深當國を領し應永年中よりて築く所なり  
事つて天正中畠山尾張守高政より居城し松永久秀より勅命あり織田信長言貴山の松永  
久秀より高政より又も此の城をト云右の石不動尊安置の地より凡二丁余りありの  
丘山の林中に高屋の城の碑あり碑文曰

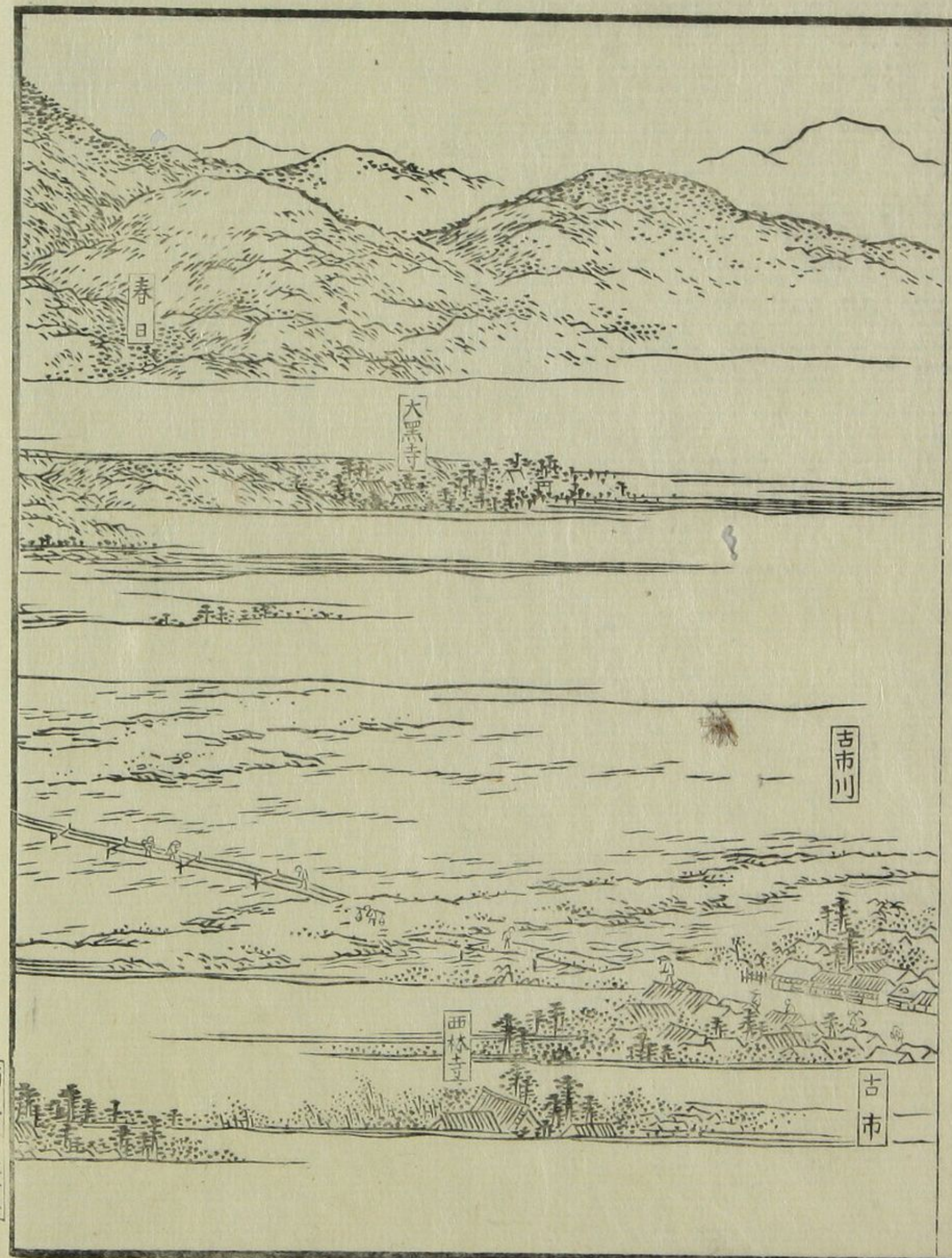
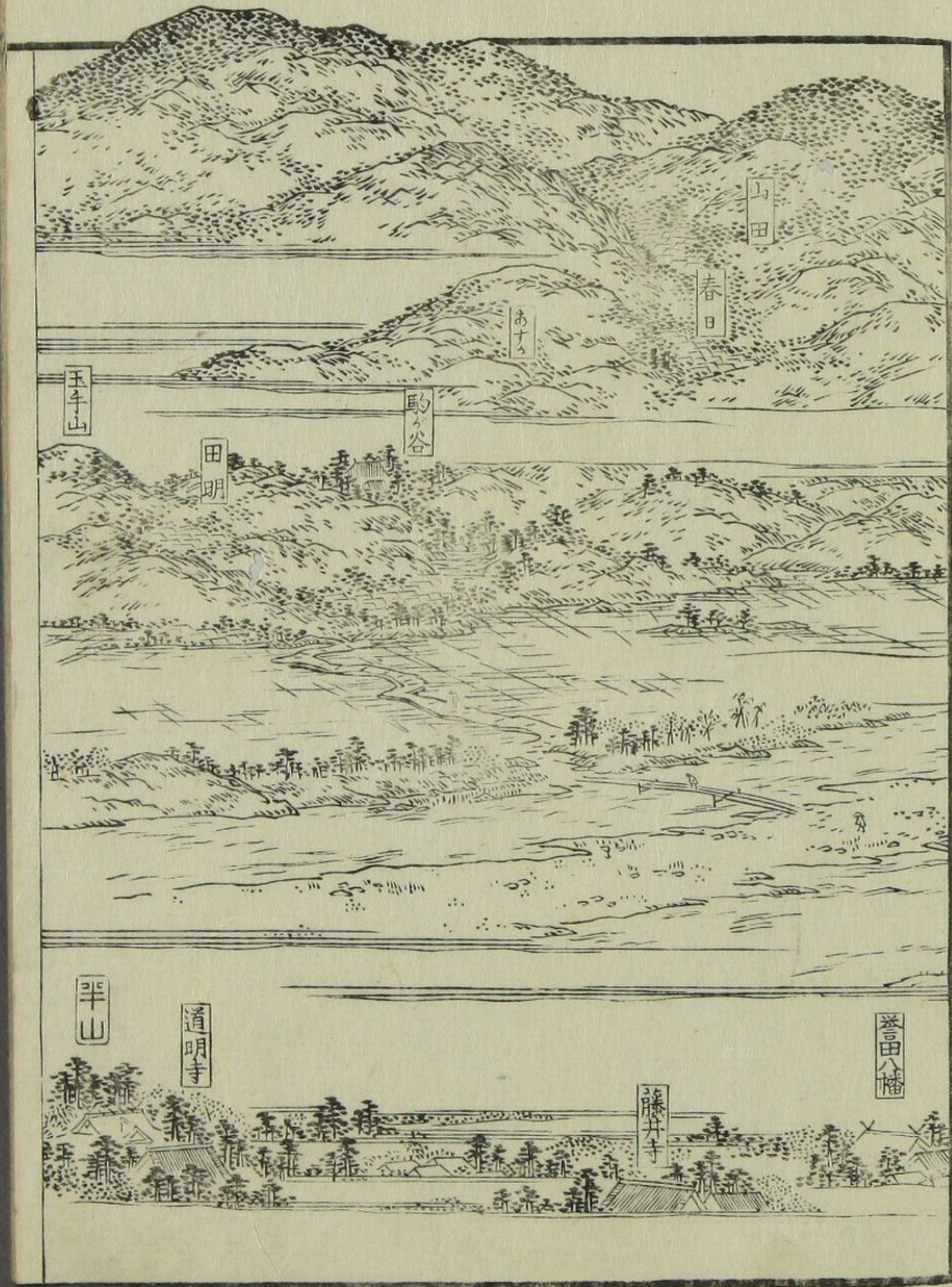
### 高屋城

河内古市郡高屋城者自應永中畠山義深始築之至此四  
百有餘歲遺壁殘壘尚可以見英雄割據也當時縣尹岸本  
君所謂河之神明宰思近慮遠仁政不可勝數頃者亦將濬  
其城池以湛綠水以應赤地之變其令勿亟庶民子來不日  
成之嗚乎昔則以血流殺人為功今也以思活波民為績真  
太平之化哉因欲勒其舉於石以傳君德德于不朽予代里  
老而援筆銘曰 百丈之岸有千載松氏休其蔭蟠根如龍  
文政十年丁亥秋九月 浪華 旭道一撰 界浦扑堂書

### 石川

古市村の出口の流きく石川郡より流きて古市より惠我川より碓井を歴て安宿志紀  
の西郡に在る川と越く真行國が越大黒寺壺井通法寺あり右の道條を行あり







井徳院

碓井村より古市の良しとして街道の左なり 正宝山と号し  
本尊十二面観世音長二尺一寸 春日佛師の作 願檀 毘沙門天王と安ん

碓井

境内あり 僧正行基の掘りせり所と云 清泉小四時増減あり 此水は清くして所

玉手山安福寺

安福郡玉手村にあり 古市の良しとして 道明寺の東川向ひあり

本尊 阿弥陀如来

浄土宗 鎮西派 洛東 智恩寺より 常行念佛と終ん

瑞龍院殿二品前亞相天蓮社順譽源正大居士

尾州公の神牌なり 南の願檀に 安ん 此御八尾州御二代の大寺尾

經堂

宝冠弥勒と安ん 龍眼肉樹 客殿のわたり寄附

壽世堂

山頭小あり 行者の尊像 聖室理源大師作

國見丘

當山絶勝の地あり 西眺望 浪花の金城とて 千戸の家川々の流を海河の通船四

船之松

國見の丘なり 曼陀羅堂 當麻四三の圖と安ん 四方に千体佛と安ん

尾州御廟

廟塔のわたり 敷石廟門石刻あり 又石の離あり

開山堂

開山阿憶和尚の 玉井 開山塔の前より 又當山の嶺に名泉あり

鎮守

三天山より 辨財天 毘沙門天 大黒天と祭る

當山

原古寺として 行基大士草創あり 幸久く荒廢して 只一字の

草庵

のわたり 村老をまじりて 守はるに 阿憶和尚といひ 若洲の産より 聖見義勝と

江府靈巖上人法脈の玄孫

くく日夜辛を累く 習字し 諸國行脚の時 寛文年中此地より 微妙

の靈域あり

とて 官許と得て 佛屋を開け 浄土宗派の精舎として 當山開

基とる

其頃 尾州亞相光友郷和尚と 歸依し 佛牙舍利三國無双 曼

陀羅名跡等寺田若干と副て寄附し

因是堂舎 巖重と 建営し 依

當寺ハ

聖徳太子の御時 寺院の 建法の 風俗として 高梁低く 柱として 地

震し損じ

暴風と倒さば 萬世不易といふ 今の世といふ 是と阿憶建つて 風色ハ

山川堂社

城廓民家 海島とて 眺望し 當國第一の名勝なり

玉手山

安福寺 境内より 東の山として 山頂に 靈泉あり 名を見へり

又勝松

山中に 二十餘箇所あり 大木あり 中より 金環陶器あり 堀出せりト云

土人曰く

山居の地あり 然るも 信用一が

壙

土人曰く 山居の地あり 然るも 信用一が





王手安福寺

當山川の東  
安宿郡  
道明寺藤井寺  
譽田古市  
川の西あり





支六帖  
此敷山  
河内所也  
所々山の片居  
雪うらや  
流せよせよ  
一々  
右 此山八田明王寺行山末の園也  
博多川  
續日本紀  
測も流も清くそ海  
~~~~~川~~~~~成  
~~~~~そら海~~~~~も  
持多河なる川の別名にて  
備忘の神社の爲のちり  
備忘川と云



其二  
本堂

西五ノ二十四

平山



伯太彦神社

延喜式出 天安二年二月 預官社云云玉手村の坂路あり  
天王墓といふ今牛頭天王と称す安福寺の鎮守と云玉手の生土神とい  
此辺踏躰ありて春艶色とありて故  
つと尾の社といふ例祭九月八日なり

奥田忠一墓

河内鑑云大政軍の寄手奥田二良右衛門忠一討死の石塔あり同寄手井上四良兵衛  
神子田四良兵衛岡本嘉助下野道二阿波伊兵衛此所にて討死其卒の討死數  
あつた又此山に古礎多し

慶長戰場

行山玉手町明諸村の間にあり今此辺の土中より武器出る事あり  
銅板重〇張の楯矢根亦近年田圃の中より安福寺に蔵むとぞ

伯太姫神社

南にあり今白山権現といふ  
延喜式出 天安二年二月 預官社云云田明村より則ち玉手村の  
大黒寺 大黒村より天童山と号し 禪宗曹洞派 中興密山和尚 此地古市郡

本尊 摩迦羅天

役行者の作 長六寸許 腹内に安置  
此役行者葛城練行のといふ大黒天山頭出現孔雀明王の法と授けの人は是より行者の  
修驗道成しりて金胎西部の密法とて自ら出現の像と彫刻して此に安置しといふ云  
本堂の左の前あり 天智天皇四年此に休らひといふ云

大黒石尊像

僧坊の内安置 石簪河内国大黒石といふ是あり傳てり門前大黒坂  
と号し此より石川のわかれの中大黒天の像しる石金剛山の水より  
あられ来る一奇といふ予が知る人も  
秘來秘藏せり



大黒石の圖

凡長五寸許

大黒寺に寄る所國のどく石質精密とて  
わく色あり

大祁於賀美神社

同大黒寺の南あり 延喜式出 今山玉と号し  
此所の生土神といふ 例祭八月廿六日  
駒ヶ谷 駒ヶ谷村古市の東八丁なりて浪花より大和に至る街道にて竹内峠より出る嶺あり  
則ち是より春日山と歴て峠より又當摩にゆきり山田より左へ来て岩屋越と申す  
傾路に當村と春秋二度の牛市あり他國より牛を多く牽來ててふに遠近の博覧あり  
てて市とて價をとり賣買の駒ヶ谷の牛市とて世に其名高し

馬蹄石

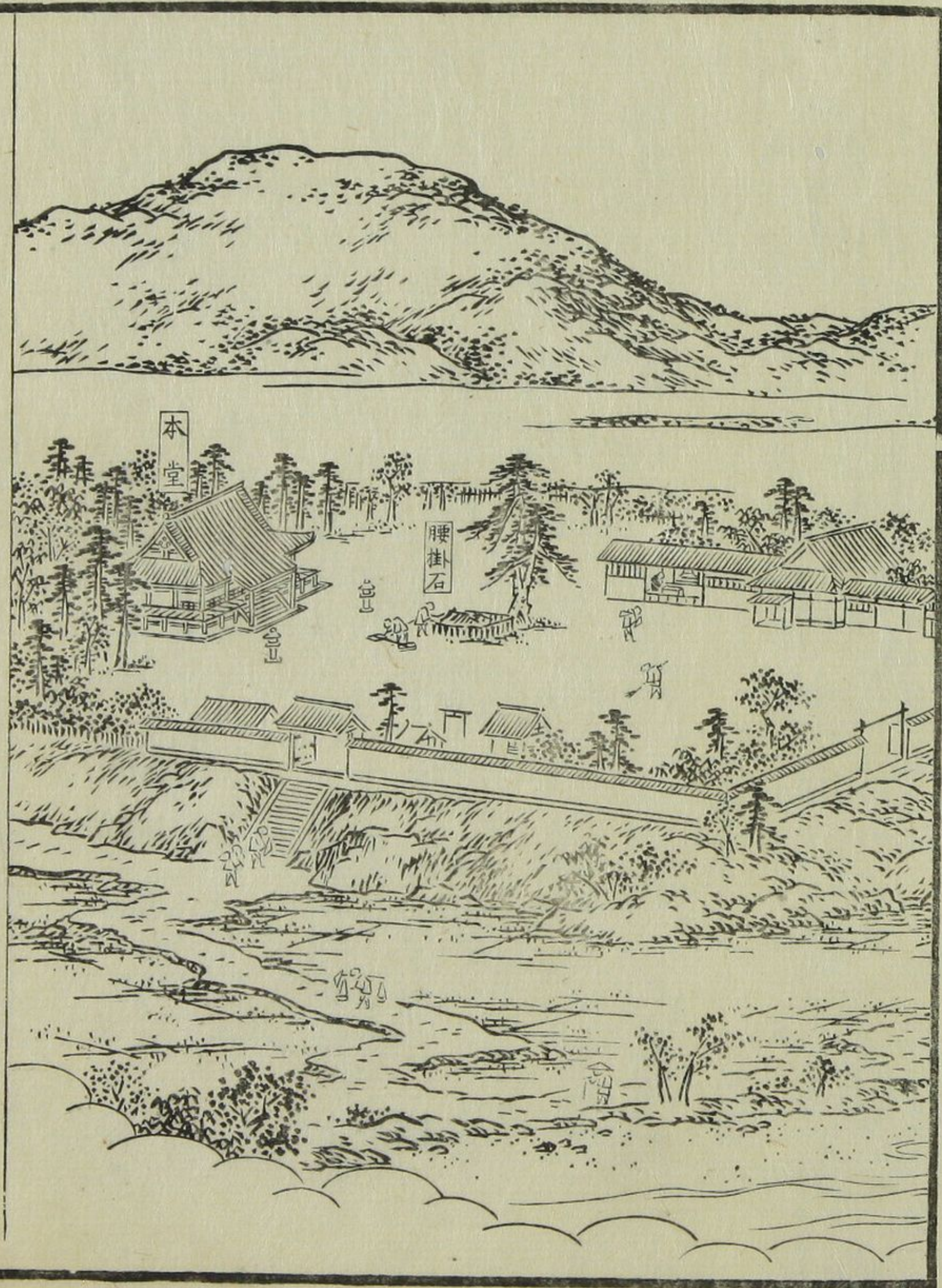
當山中より出る其色青黒く性固くして馬の蹄の痕あり又此石を鉄破お其  
中より蹄のあきありて出る風土の奇といふ現にほくこあり  
太子の駒といふものにして駒ヶ谷といふ又馬蹄石といふ生じて自然の奇といふ

杜本神社

温知隨筆載五畿内神名秘決曰河内國杜本神社杜本後部  
矢羽作忌寸口傳云杜本神社二座齋大人神經津主命也俗  
曰香取明神 神祕抄又  
新撰姓氏錄曰矢羽作忌寸布都努志命十四世孫伊波別命  
之後也

鹿文が按曰杜本神社者伊波別命と祭歟以氏神崇祖神とす





大黒寺

俗名おろろの  
大黒ト云

役小角腰掛石

大邪於賀美神社

延喜式神名帳に  
石川郡しつり会  
此地古市郡に属し  
古今郡界の  
遠よつ例多し





金剛輪寺覺峰師云人皇十代の項香取明神の神孫十世伊波別命此地に倭せたまひて  
組神經津主命とあり余り今この杜本の神社に在り是なり其末あり此地に在  
して私仁の項矢作忌寸と申人則ち後孫あり姓氏録にも記されり云々

延喜式云  
杜本神社二坐並名神大月次新嘗

同書内蔵寮式曰

杜本祭夏四月冬十月並上申日祭之預前裏備幣物等

使等進發 幣物使裝束見式

三代實錄曰

貞觀元年正月廿七日奉授河内國杜本神正四位下云

公事根源曰  
四月上申日河内國小侍る杜本の神社の祭也午の日使より和五年

四月小祭八日ト云々

愚按今有所の杜本の神社後世再興せしものあり一既天明三癸卯年の印本

三餘抄云

河内志曰杜本神社古市郡駒ヶ谷村有式屬安宿郡ト云依て駒ヶ谷村榎亂十  
のころ一向其所と云々勿論村方民國帳等穿鑿の所字も亦をわく駒ヶ谷  
村と國分村と領つたの故や右杜本の社國分村火の谷のト云々當時杜本  
の宮と唱へ来るなり古代杜本千軒と云々坊舎千軒あれり勅使御参向これり  
ト申傳ふ其迹辺土中より古瓦あり堀り出ると云々社頭と申も亦云々

大木の榊これり其木藤云々といふ春花咲きながら常ありぬ木とて神木と  
申傳ふ所凡四五十季已前山田の日陰とありて山持主善九郎右の榊と伐り  
ゆき斧の後ていび榊を残り残るは山二面燃ゆ右の斧持主の家の内へこび  
来るト云々徑り善九良妻病死は是火の谷大明神の影向のつゝ木りや村  
中騒動して取あつた榊と建つ神樂と捧げ神の御心とあり奉り此書  
の故杜本の宮の事相改むるの所右の書物祭神記録及び祭祀善九良方これり  
善九良も此節殿に死してやや九歳の孫一人相の親類ども打より書物せん  
取出りより其榊木と伐り榊を者の末孫と今大明神と異名と呼来り近奉  
國分村枝郷ヒガノ野と云々信仰奉り小社の上覆と云々九月九日神酒  
燈明と捧げ祭るとあり先年並河五良順在のささみ火の谷の事と所の者申出  
りた火の谷の谷の氷の谷あり然る杜本の宮と申れ社ありささみはささ  
これ有るは後日村方の障と云々や疑惑を生ず曾てあれは昔と云々  
此處國分村百姓頭と云々老人西二人尋問る一輕墓村吉良兵庫と云々の撰  
と聞けとて其後紀せり惜む一並河氏の尋ひ應せり此人諸國志編集の  
大志あり遂にありて僅に五幾内撰述とて定めて杜本の神社と闕めんとす  
まれば此時いふ今も思ふ事とて明らなり

今見る所本社黒木の鳥居神樂殿も最神とびて其宮古雅なり神祠の  
下に左右小隼人の大石と云や言傳ふる者を建つるさし南都の元明帝の  
陵にあり石の形と模ふる者と見ち後世好事の者の模製あり





尚隼人の事ハ南都の條下小女く出せハ畧ら

十六山金剛輪寺

駒ヶ谷村の山中ニあり  
安養院と号シ真言宗

本尊 釈迦牟尼佛 長四尺五寸

薬師如来 辨財天女俱

聖徳王の御作 堂内ニ安置

観音堂

社本社の後の山上ニあり

十一面観世音ニ安置

此尊像ハ補正成の念持佛にて赤坂籠城の時靈験をうむりゆひ戦死の後息正行所持の経巻をひきよ未だ紙の寫しと副て當院ニ収む

幸登て天正の兵火かからず神社佛圖も煙とあり  
寺僧ハ本尊靈佛付宝を負て他境ニ逃ぐり此観音一休紛矢して其行方をもく久く星霜とあり  
時貞享の頃住僧春惠阿闍梨村老と俱に靈夢をかうりる吾人々大和国神南の三堂  
小あり早く向地ひむくを告ぐ人々も速小還寺あり奉るなり

堂前ニ迎飛鳥寺の額を掲ぐ

楠廷尉靈祠

観音堂の傍ニあり楠大明神といふ  
左金吾正行の作

楠正成塔

山の奥ニあり云光寺と鑄此塔婆造立の砌支族和田正遠より  
當院へもつる書翰あり次ニ出入



高凡三尺 巾壹尺四寸







駒ヶ谷金剛輪寺  
杜本神社  
牛市



楠廷尉正成像

當寺所藏

長凡二寸許

面



○此像の形は、  
合せりあり  
傳云正行七又言提の  
為、數百体の像と  
ありて由縁あり  
寺院におさむ

○寛政年間薩州家士永田某  
信仰し、つて社成造り  
寄附し  
其外甚

奉寄進  
檀造御社

薩州家士 永田平左衛門

背



あ輝くをや臣のたより  
月日しやてい  
しとていふる也

凡月海書

側



西洞院中納言時名朝臣御筆

和田將監正遠書翰之寫

一編々皆達ハ御寺内マカノ乗取キモノヲ他ニ到官殿中  
之ニ今カクカキ物支於寺ノ禪相達ト度ノ事ニ具沙活  
作ルカ事ハ在ニ殊カ種カ有ルカ所カ此ノ中ニ院ニ在ルカ  
高五尺五寸半ニハ端カ所付而達ニ居ルカ事ハ度モ文明際殿  
石牌ニカキテ之ニ雜カキカレカ所カ此ノ中ニ院ニ在ルカ  
カキテ之ニカキテ之ニカキテ之ニカキテ之ニカキテ之ニ  
カキテ之ニカキテ之ニカキテ之ニカキテ之ニカキテ之ニ

安喜院方丈

お登  
正成

阿闍梨覺峰師塔

正成の塔の傍あり

文化十三年四月四日没 行年八十四

覺峰律師ハ真如金剛師ハ四山人或ハ麦飯仙ノ浪花ノ三村秋親ノ子トテ十九歳ノ  
大今里妙法寺トテ之ノ難髪以契沖トテ四世ノ孫弟トテ常ニ和歌ヲ詠ト



國史に歌る性質閑静を好んで僧侶の衆と交り壯年庵を構へ飯飼の圃に  
移し又駒谷小抄に其より密宗修行をて四十余年猥り山と下らば俗  
塵を遊ばばりて古器と歌ふ當時いひて河州中の國子の識者ありとぞ  
藤永手墓 山内より高三尺寸横二尺八寸碑刻より自然石なり

續日本紀曰 寶龜二年二月己酉左大臣正一位藤原朝臣  
永手薨時年五十八奈良朝贈太政大臣房前之第二子也  
母曰正二位年漏玉以累世相門起家授從五位下勝寶九  
歲至從三位中納言兼或部卿寶字八年九月任大納言授  
從二位神護二年拜右大臣授從一位居二歲轉左大臣寶  
龜元年 高野天皇不念時道鏡因播籍恩私勢振内外自  
廢帝黔宗室有重望者多羅非辜日嗣之位遂且免矣道鏡  
自以寵愛險渥日夜僥倖非望于宮車駕定策遂安社授者  
大臣之力居多焉及薨 天皇甚痛惜之詔遣正三位中納  
言兼中務卿文室真人大市正二位負外中納言兼宮内卿  
右京大夫石川朝臣豐成躬躄之中累遣正四位下田中朝  
臣多太麻呂從四位上佐伯宿禰孫今毛人從四位下大伴宿  
禰伯麻呂等監護喪事云々

元亨釈書云

大傳藤原永手薨せし其子大中大夫も病にからまじし醫治効らざれば  
法の救ひを乞ひて比丘を乞ふを比丘香と燒く持補陀時大中託して我  
永手あり我平生法華寺の幢を飾り或ハ八角七層の塔を營くといれ  
我其より四角五級を造らむ此より由て地獄に墮て身大なりといれ  
いざれつ手ハ火釘を釘うす斯く野々忽ち閻王の宮中ハ大相元  
塞けん王おとろく何ある由を問ひて傍り人の問はれ日本國ハ  
藤の永手が子病に犯されん呪師悉く焚て持補陀其相のついに及  
びて有り言れば閻王我を救へて本立し歸りの山而も我死すて  
燒て寄るところあるは屢來告る言終りぬれば病ハ即ち愈らる

夫當山ハ往古聖德皇太子驪駒御して四海を巡り見給ふ此地瑞  
雲漠々として昇降是正しく靈域ありとて詔を蒙りて梵閣を創し  
て十六山安養院といふ蓋此より前に并王后妃の陵墓累々として四  
双つりて依て山跡といふ時の人ハ近つ飛鳥の御寺も賞ばらるや  
年歲積りて後醍醐帝の御宇世上穩らざれば天下清平ハ御禱



のころ宸筆の御製と蔵り給へ南朝 後村上天皇より金剛輪寺と勅し  
 給ひ横津國菅屋庄と寄り給へ論旨國宣も傳り二條為明郷の歌書西行  
 上人の背像此余什寶奇物若干傳へ就中日谷推宮之碑古鈴古鏡神  
 寶土鏡古瓦飾露金鏤勾玉管石木數品あり 先版本奉りてこれ古八伽盛巍  
 たる古判りりりり中古兵燹の災に依て悉く灰燼となり厥后四觀に復  
 ころ事なく僅の丈室あり存せり然も風景の地にて東へ近くと鳥  
 の飛鳥の里前より名を飛鳥川流きて早浪尾上の松に春霞雪の石川の流  
 け涼く啼くく郭公千草すく虫は音妻を鹿峯は月雪う埋む冬の日田  
 爐の櫓々寒く凌び觀念は便ありもは草庵のさぬ最風雅やれ珠勝あり  
 役行者加持水 駒が谷の東街道の傍田圃の中より 標石を建  
 日谷推宮社 駒が谷より聖の方之町ありあり林中に石祠あり内は日谷推宮の碑と納む是ハ  
 金剛輪寺に秘藏する所の碑のうりあり才法恰好かりり瑞齒別天皇  
 伊波別命 袁登賣命と祝ひ念まり  
 此所ハ瑞齒別尊かの曾孫訶理と誅一のい明日大倭(御幸)のいあんとて夜此地に被  
 袂あひひ一四蹟に近飛鳥の名もつに起きりしと也

日谷推宮社

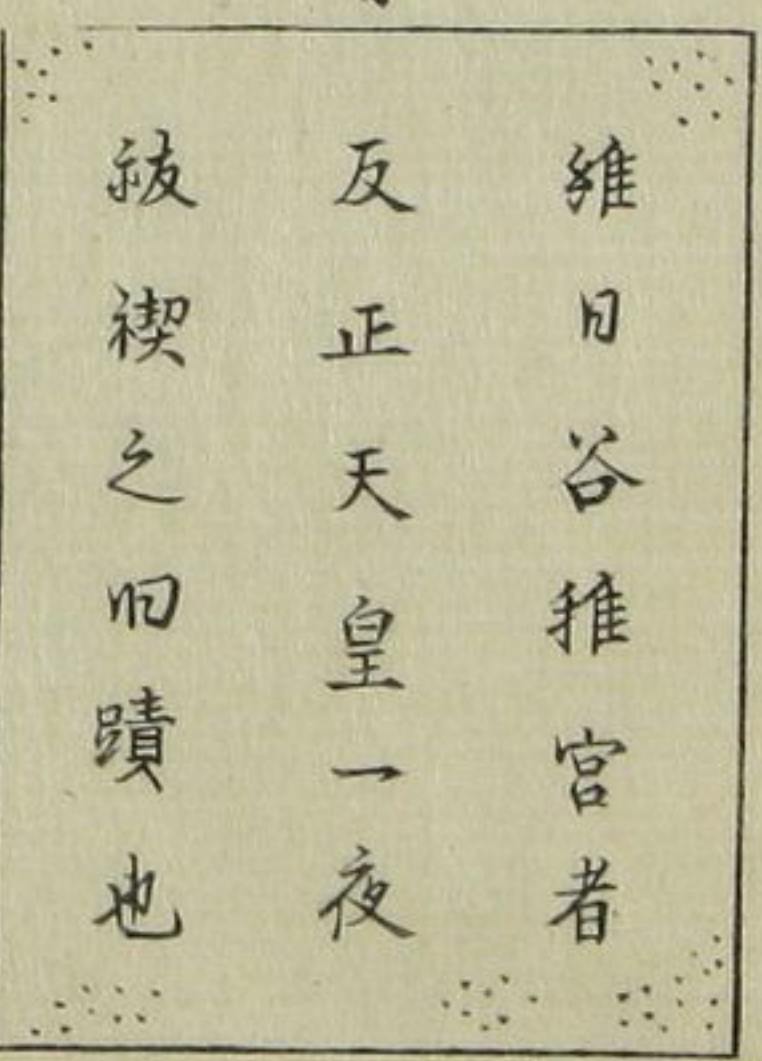
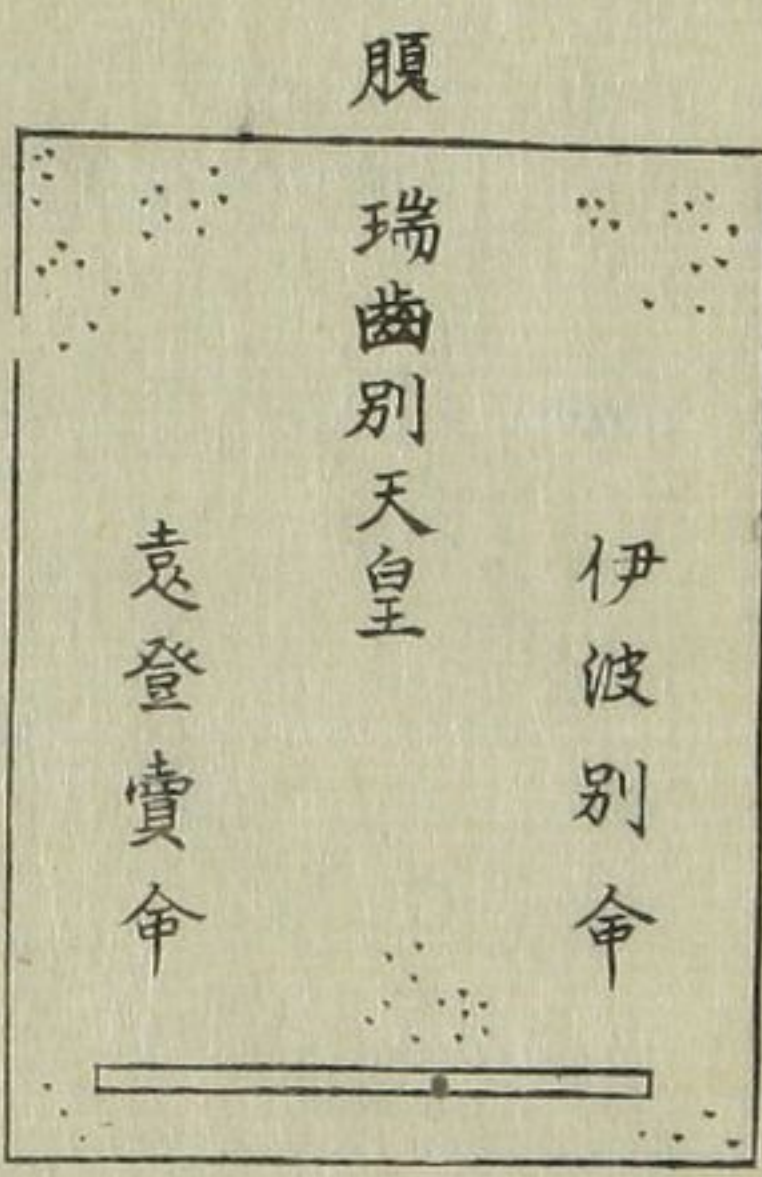


下園や  
 地中ありの  
 祥け亭  
 嵐亭  
 山もゆるりし  
 園のあまが  
 ちま



石祠内納む所の碑の圖

豎壹尺壹寸 横八寸 厚凡二寸五分許



此碑の真物ハ金剛輪寺に秘藏せり此ハ納む所の其寫見也

瑞齒別ハ人皇十九代反正天皇の諱なり仁徳天皇第二の皇子履中帝と同母の弟皇子あり傳云初帝生まて客染美麗うかれあぐりて齒一骨のどと瑞齒別と號し仲皇子と殺しのつて立て皇太子と成今歲即位河内此丹比に敬以るまて柴籬宮と号し 柴籬宮丹北郡松原村邊

壺井八幡宮

壺井村より例祭二月二日 放生會八月十五日 祭神 中央 應神天皇 左 仲哀天皇 右 神功皇后

社傳云此地河内守源賴朝臣同賴義朝臣等源家播代の館舎あり天喜康平のころ奥州の強賊阿倍貞任守任征伐の時康平七年夏五月十五日山城國石清水正八幡宮

うくに勸請しつゝい神像ハ幡太郎義家の御作り相州鎌倉鶴岡八幡宮の神像と同時の作りとを聞え

壺井権現社

中央河内守源賴信 左伊豫守賴義 右八幡太郎義家 右三代將軍八天仁二年秋八月 紹興元年 齋宮より

壺井

傳云奥州朝敵退治の時官軍湯及ぶ頼義義家の御子伊勢石清水の御つり有て碑讀しりて巖の間に穿らるゝ泉涌出る諸軍嘯と聞り勝利を得り其古蹟もまゝ泉と壺と通てゐる井と掘り底よりいれおれり母壺井と号は清泉今も字讀くゝて病者こゝと服されば知らず平愈りりとも靈驗なり新くて祈誓人平生に聞断

香爐峯

壺井の山嶺より通法寺の鐘の銘見り舊紀ハ所見也

壺井神寶

無盾鏡

源家重代の重宝あり義家朝臣奥州征伐の時着せられ軍中より鏡なり

丸木弓

嘉保二年の秋堀川帝御脚の時八幡太郎宮中より此弓とて此弓は弦音一惡聲降伏しゆなちまう御脚平愈ありりやう奇に降災毒月鳴弦の御弓と貴い

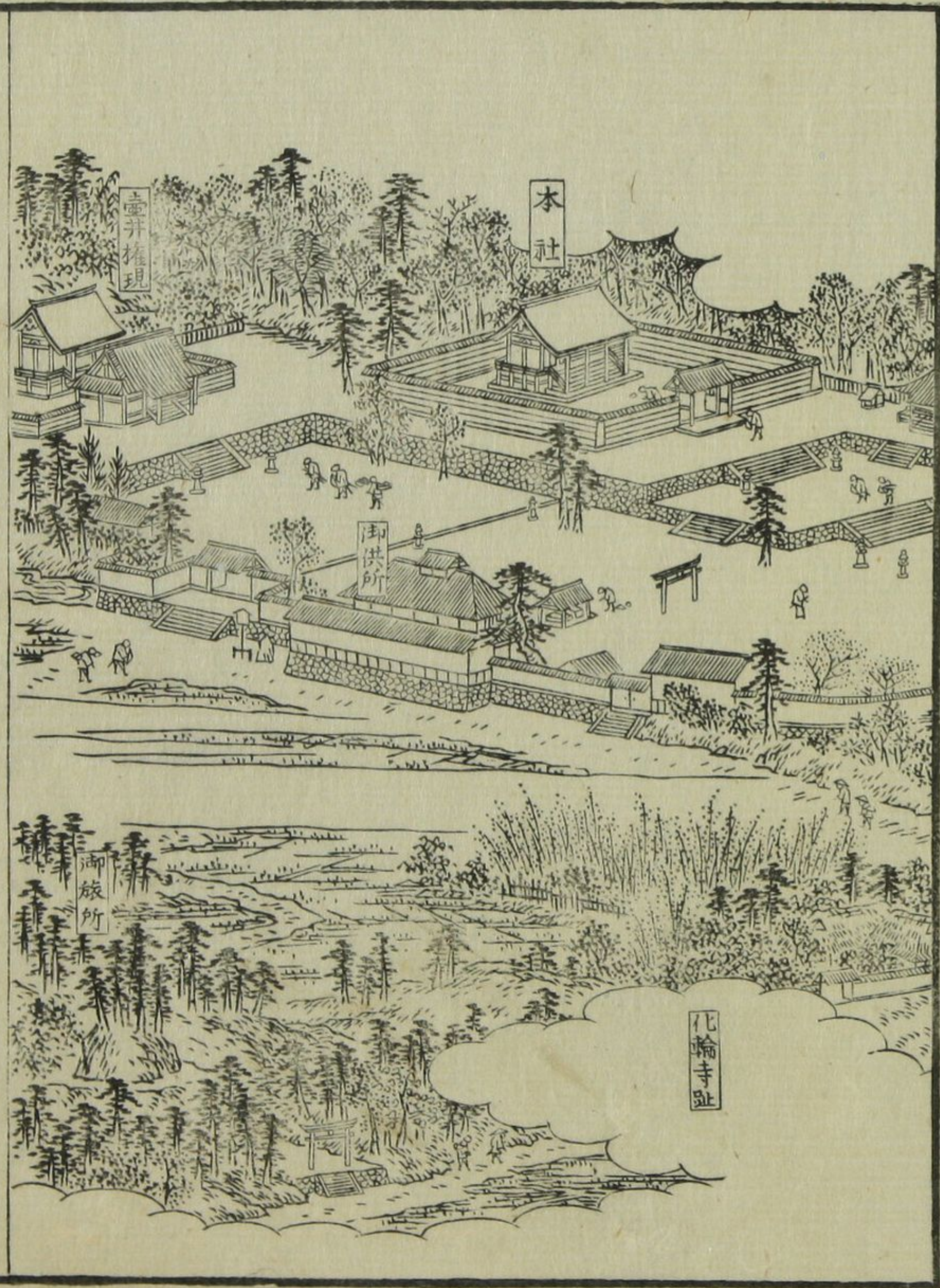
箭根

八幡太郎奥州へおもむけり一時武則と号勢とくは能き鏡三鏡と射めさし失の根ありと聞也

白薙

大小二流 源家重代の白薙なり





壺井八幡宮

古く代也

堀工轉  
柳立力

一柱

尾と

うねり

跡を

も

平山

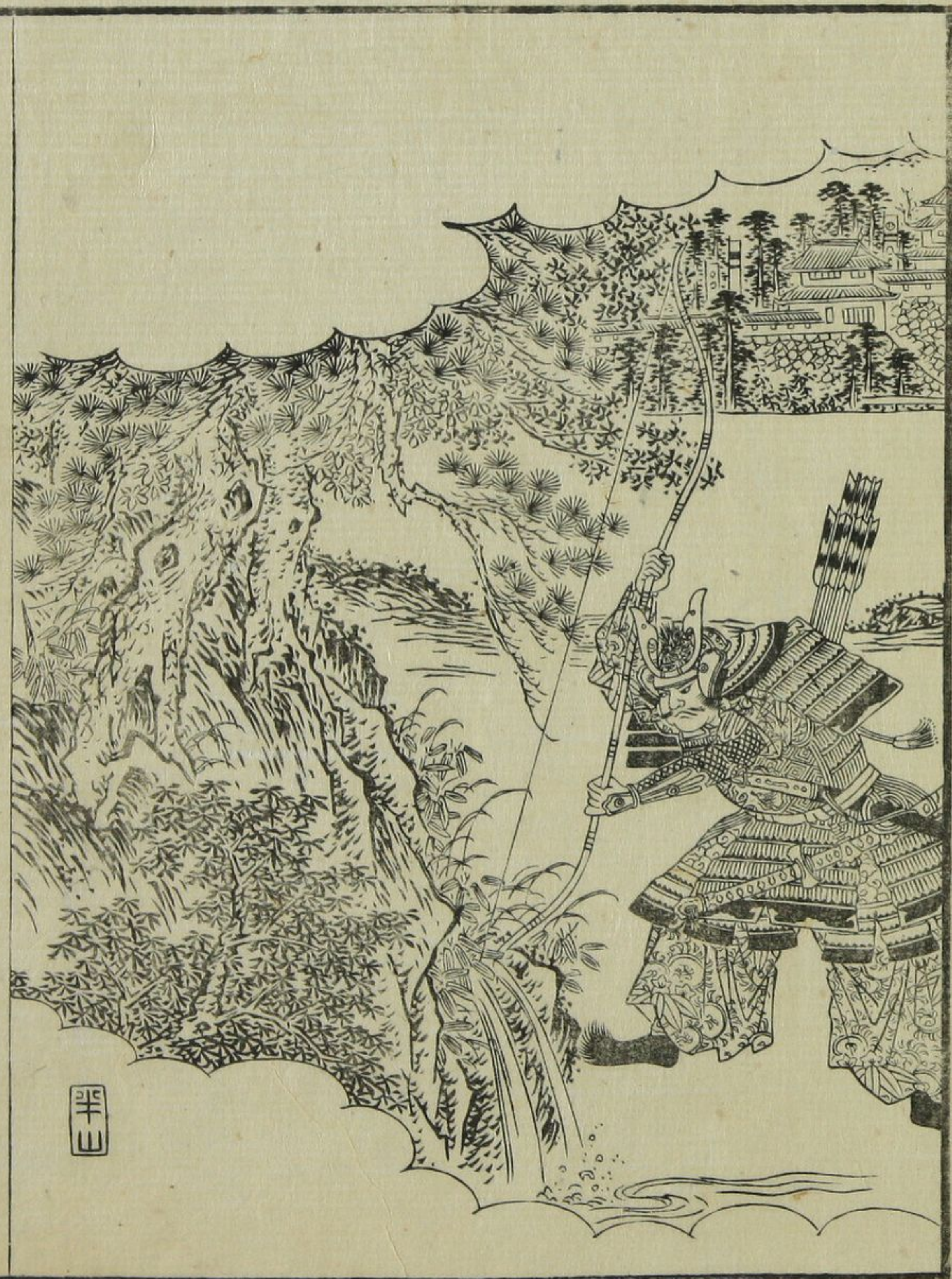
社司

壺井

之参勅地向便

西五十三





半山



義家<sup>よしか</sup>と<sup>と</sup>穿ち<sup>うら</sup>  
靈泉<sup>れいせん</sup>と<sup>と</sup>湯<sup>ゆ</sup>  
湯<sup>ゆ</sup>と<sup>と</sup>助<sup>すけ</sup>  
の<sup>の</sup>卒<sup>す</sup>

西五ノ三十五



天光九太刀

伯耆國安太夫官名左馬頭安繼作鬼切丸同鐵と以て作し雄雄の御太  
刀なり多田滿仲より相傳あつて八幡太郎出陣の時佩せし朝敵と去り  
ゆあり以上五種の神寶なり

勝色鎧 多田太郎初陣鎧 八幡太郎數鎧 新羅二郎初陣鎧

後醍醐天皇真翰 同繪旨數通 安部宗任野太刀 長六尺余

後村上天皇繪旨 楠家菊水旗 同太刀 此兩種、當國藤井寺の合  
戰の時正行當行奉納し給

楠正行書 同正儀書 此外ふりくわり  
るに異度

當社の例祭は弥生二日午の刻して神樂之基御後所へ渡御り其翌初

り六太鼓猿田彦神神木一本綿とかけ 鉾八本弓箭二張太刀鎧金蓋神供乃

唐櫃供奉の社務ハ午粵ニ乗テ嚴列と紀社家のゆんく神樂乙女神人

宮仕等前後供奉し石川河原の芝生に四阿屋とまつし是と御後

所して此渡御奉る然つ時洪水りより延享年中より神は

西の方義家公の御廟のふり改めりより原此地源家公代武將乃居

城して河内明仁任國あり故ハ八幡宮と勸清二代の墳塋も近隣り又往昔化

輪寺といふ淨刹なり是ハ頼義公奥州征伐のとき敵身方亡卒と追獲乃  
為建らる本尊は慈覺大師の作なり阿弥陀佛と安置以後世廢寺と  
ありて化輪寺藏金堂芝あど圍の字よりぬ漸本尊ハ残りて壺井の什  
寶とありぬ今も此辺ハ皆一雙の地して源家の領と見てより後世さ  
ぐと變り行て昔の形と失くして麻姑の桑海と見るに等し

石丸山通法寺

通法寺村にあり宗肯真言新義 和州長谷寺に屬し

本尊 阿弥陀佛 觀音勢至の二尊 定朝作

不動明王 智澄大師作 長六尺 十一面觀世音 長六尺余  
作不詳

右の尊像ハ元禄年中 常憲院殿御寄附

觀音堂 本尊千手觀音長一尺五寸許 源頼義公感得

鎮守 本堂の左あり 天照太神 八幡 春日の 上ノ社 稻荷山より水分辨天 稻荷

當山法會ハ 七月十七日 十八日修行あり

頼義公魂舎 觀音堂の中より



頼信公墳

本堂の舊三町并有

義家公墳

頼信より一町并奥より

當山往古河内守源頼信公の館舎あり長子頼義公相傳しく此に居住し給ふ然るに此地の東北に海上人の舊跡ありて今に海谷とよび傳ふ或時此谷より光明赫々として諸人奇異の思ひを以て頼義公靈光のりとして尋

祓のいし大慈の靈像を以てせり則ち長久四年九月に感得しつひに城中の一宇の精舎と建營して通法寺と號次此所を於て八幡太郎義家公加茂治郎新羅三郎等より出延り其後平相國入道世に出て源家衰廢一尺僅の草庵に感得の大慈尊像一体のを在り事年久後世元禄十二年辰の春 大樹 常憲院殿尊君台命と下して今の如く建立小及び諸堂巍々として源家の宗廟とあはれぬ

仁海上人舟州奥佐野浪里宮道氏より元果阿闍梨事つて密教の事あるの事ありて傳ふ流義のすうりはつと取らるるに會得せりまき後醍醐のころあり小野の地とえして密教溝の岸と啓かきくわ四つより來りはる人其行業より者多し世に小野の宮派と号し寛仁二年六月早もるより物々神泉苑とちて清雨經の法と修りてられ大雨降下るるに自之夜がのどけり其後長久五年又長久四年其雨の法と修りてとうけりて修は一皮もむあかた時の人雨乞の僧正と修せり元兼九年の五月十

元日小遷滅せり行年九十二歳尚より元亨親書より出然き頼義公大悲の像と感得り仁海僧正六十九歳の時より

源頼信公

源満仲の三男初武勇と以て兄頼光と名を稱し藤原保昌平

惟平平致頼等皆從遊して二條帝正曆五年初と奉り群盜と搜り索を長元元年平忠常上総國に叛き海に據て城と築く追討使あきて攻れも功あり時頼信詔のりして奉り是と討つ然るに濱辺舟ありつらんも爲ことあり頼信馬と跳りて海に涉り衆皆これに従ふ忠常も其成見て正しく神の所爲ありんと畏服し隆泰は頼信忠常と携りて級洛に忠常道とて死に故に其首と梟まかる威名大に振へ時從四位上鎮守府將軍河内守に任り嘗て源信僧都と滑して止觀圓妙の言成聞き永兼三年九月に逝し年八十

源頼義公

河内守頼信の長子なり

後冷泉院永兼六年安部頼時より其子貞任奥州に乱して起り郡邑と掠り取る此時詔り鎮守府將軍に拜りてこまに討む天喜五年大に頼時と攻て遂に射殺し其子貞任宗任支黨と卒て官軍と屢戦し康平五年に至つて義家義綱及び清和武則や傳り貞任と誅し其弟宗任と擒り凡此後永兼六年より康平五年に至るまで十二年の間其功莫大ありと謂ふ其初陸奥守兼鎮守府將軍小

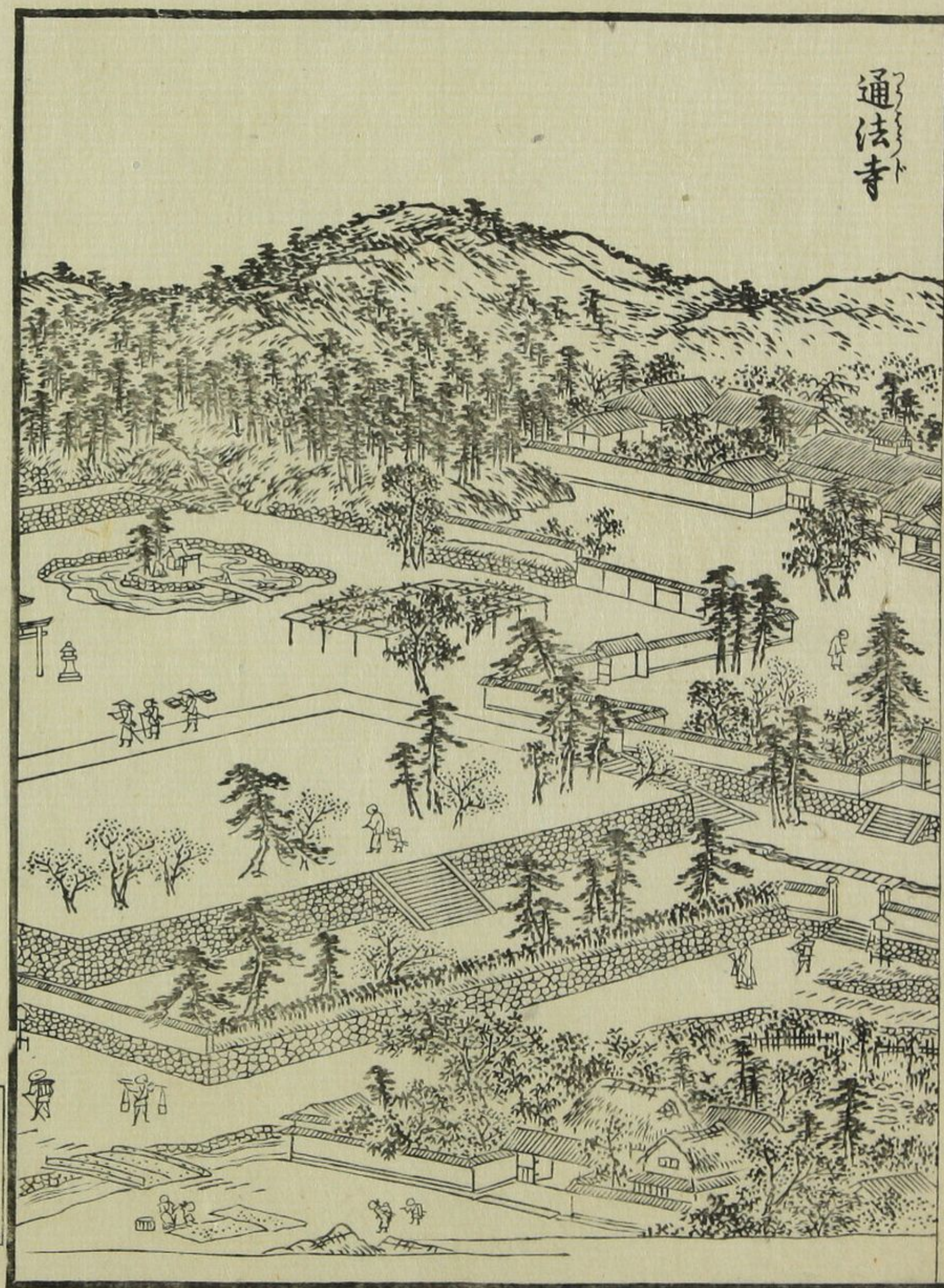
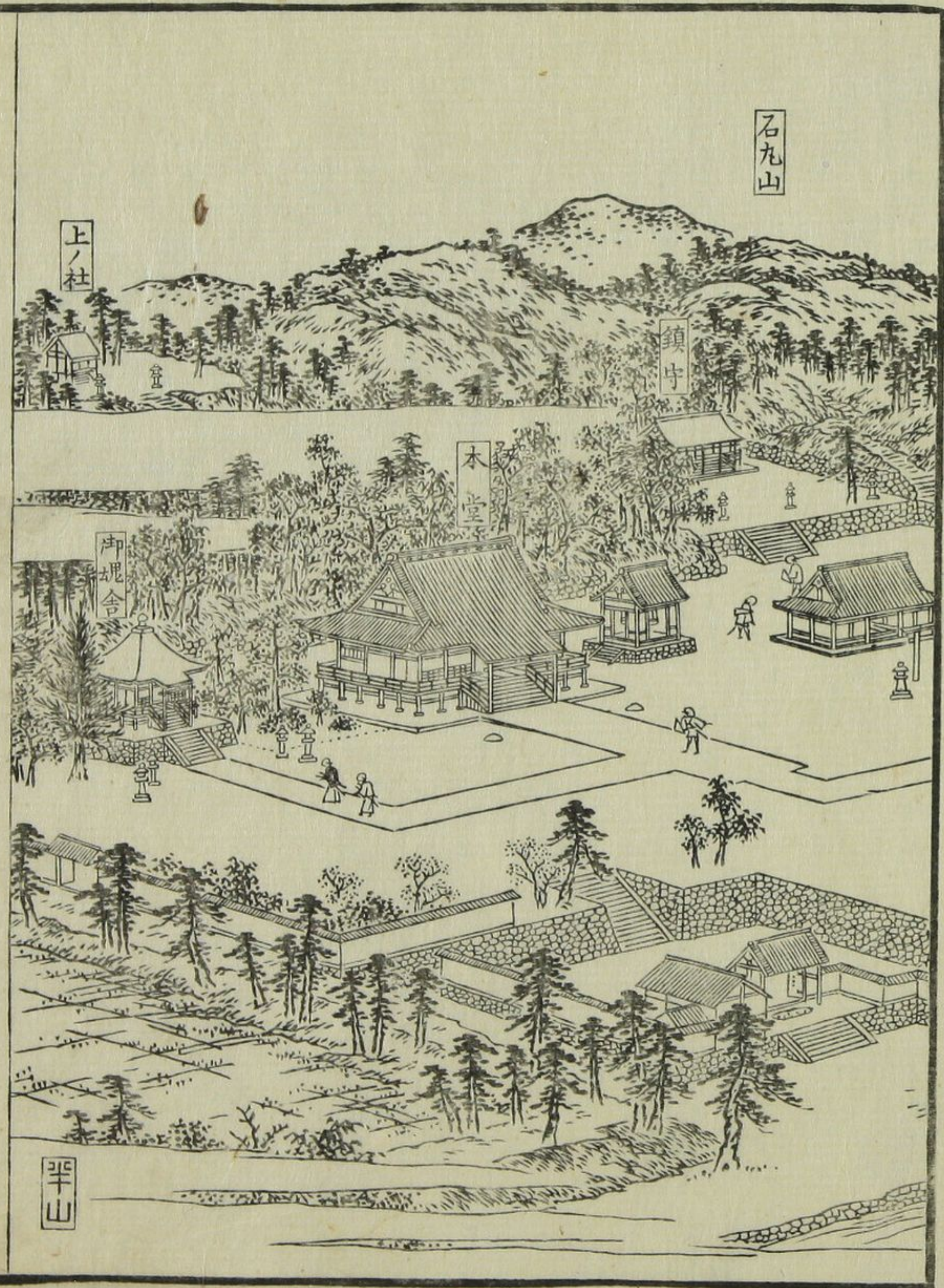


任、又増爵あつて正四位下伊豫守とあゆ永保二年冬十月卒、時年八十八  
**源義家公** 頼義の子なり兄弟四人あり兄僧とあり其次義家督と受く八幡太郎と号するは是あり三男加茂二郎義綱四男新羅二郎義光なり義家為人勇力あつて且騎射と善く又頼義に従ひく貞任一族と滅ぐ一従五位下出羽守とあり寛治五年清原武衡おび家衡奥州に乱と起り義家彼となぐ東關の士伴助兼二浦為次鎌倉権五郎景政藤原清衡等義家と接し攻る事甚しく遂に武衡家衡と誅戮し嘉保二年秋八月 天皇瘡病に罹り且禁中數々恠異あり陰陽師占文と捧て曰武衡家衡が祟ありと是よりして僧正降命とてあまを加持せむ義家として宮中と守護せしむ是より於て義家二度弓弦と鳴り恠異手と従ぐり息む天氣平に歸りありとありあれより先清原武則義家が弓勢と試んと欲するのといれ義家堅甲三領と重く是と樹上より射るに甲三領とほりぬ武則大におどろけて曰是神明の變化なりと天に元年秋八月卒、時年六十八  
 河内國名所圖會 源頼義公永保二年五月二日卒、 源義家公喜美元年七月四日卒、とあり右當山の寺記よするもの歟  
 本朝通紀云 永保二年冬十月伊豫守源頼義卒、  
 天仁二年秋八月前鎮守府將軍源義家卒、ト云々



義家飛鷹の  
 乱を見て  
 野に伏兵  
 あり候  
 知候











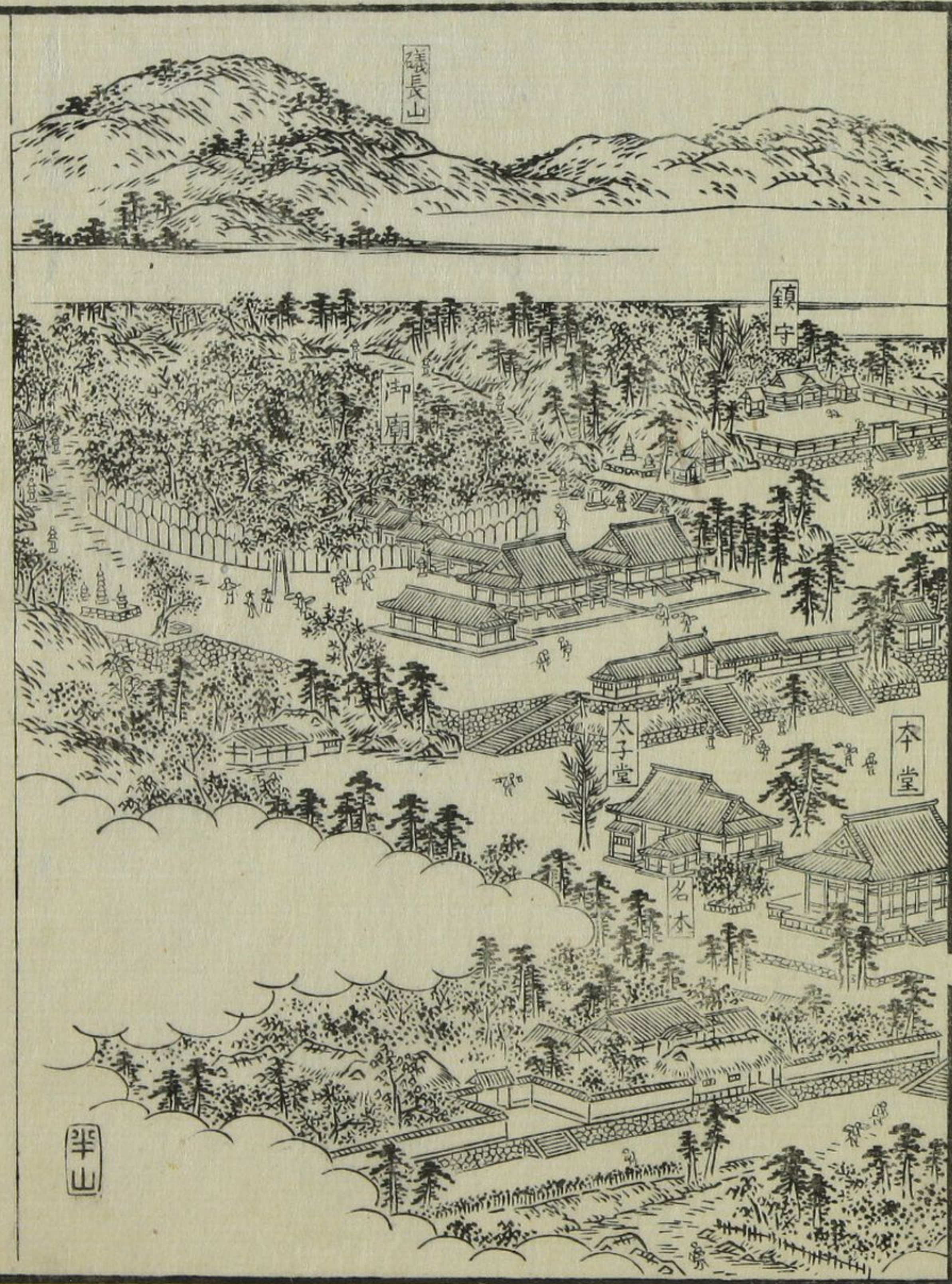


磯長叡福寺

俗上の太子ト云

**聖霊院** 金堂の西北ニあり聖徳太子十六歳植髮等身の尊像長五尺一寸  
 御父 用明天皇御腦の時太子赤衣の上ニ御袈裟と有り極香爐と  
 高欄の葱宝珠ニ鑄云河内国石川郡叡福寺即太子堂即再興 于省慶長八曆  
 内大臣豊臣朝臣秀頼卿奉鈞命即奉行伊藤左馬頭則長 癸卯十一月吉祥日  
**上御殿** 上段の地ニあり太子三十五歳の尊像これハ太子即在世の時大和国橋の  
 此堂の再建ハ元禄元年高木主水とツル人寄附せられあり其外回廊二天門  
 鐘樓寺も俱ニ再興ニ速ムト云  
**二天門** 天門持国の二天と安ル 廻廊 二王門の左右ハ 上御殿同所ニあり  
**浄土堂** 同所ニあり本尊ハ弥陀三尊と安ル弘法大師神下山高貴寺ニあり一復安居  
 一百日求聞持の法と修し明く小當山ニ安一札と拜せし人ヲ九十九夜ハ  
 當つて即廟ニ音聲きく阿彌陀佛の三尊未迎しこれと拜せし人ヲ作らざるハ  
 尊像あり太子の御母と皇太子と所妃と三聖の御本地佛ニ  
**大師堂** 金堂の東ニあり弘法大師六十歳の御影大師自ら三銘と以て彫刻し之ト云  
**常光院** 同所ニあり念佛堂と号ス本尊阿彌陀三尊佛と安ル信濃国善光寺の如來の  
 模形あり豊臣秀頼公再興し之ト云  
**普門石** 金堂の西ニあり葛城登山の修験者の行場ト云  
 役行者法華二十合四ノ准ハ二十八區の佛壇と云 就中當山と其ノ其五  
 普門石ニ宛て即ち皇太子と觀音の垂跡ト云故ニ當山と普門寺ト云ハ以謂ナリ  
**鎮守九所推現** 所廟の東ニあり中央熊野辨財天 巖島 東方 天照太神  
 八幡 春日 西方 牛頭天皇 稻荷 天満宮と祭ル







辨財天祠

鎮守の社の東池の中島にあり

西帝塔

後醍醐院 後深草院の西帝法華經と書寫のい

西門院塔

前大宮院 正應五年十一月九日 遊義門院 徳治二年九月廿日

忍性上人塔

池の東より棋州四天王寺より寺職あり上人あり

石塔律院廢跡

御廟より一丁半あり西の方より此より大將頼朝公御臺所

轉法輪寺回跡

御廟より二町半東にあり舎利堂愛深堂あり

燈燼臺石

金堂の前あり 不動石 二玉門の下東の方より

良觀上人石塔

御廟の東あり 願蓮上人石塔 同東の方手にあり

中門古礎

二玉門の内廿間あり 南大門 金剛力士の両像と安ん

關伽井

二玉門の下西の方華藏院にあり此井は大師総龍の礎を成りて御廟

碼頭出現古趾

御廟の坤の方十間あり此所の土中にあり置るの碑文に

碑云

吾為利生出彼衡山入此日域降伏守屋之邪見終  
顯佛法威德於處々造立四十六箇之伽藍化度一  
千二百餘僧尼制記法華勝鬘維摩等大乘義疏斷  
惡修善之道漸以満足矣

今年讖已河内國石川郡磯長里有一勝地充足稱  
美故毀墓所已畢吾入滅以後及四百二十餘歲此  
記文出現哉尔時国王大臣發起寺塔願求佛法耳

隔夜堂

二玉門の下あり石佛の大目尊

施藥院回跡

村中の西の方畑の入口より

市場舊蹟

當村市場町とつゝ皇太子六歳の御時之輪の市と同時に市屋成

五字ヶ巖

當山の峯とつゝ由緒與ふ記あり

夫當山の草創ハ推古天皇六年皇太子廿七歳の秋甲斐國司秦川  
勝より奉り驍助御調使丸と從者日本一の靈山精舎と  
ろしを巡り其時の御歌  
太子傳  
二十七年の海島の島給ふふ心と今どふふ心



まがし不二峯より初めて吾妻の國へと巡り北陸道かへり越後の國神  
魚浦と登りし時海辺の石を築とりつて一首の歌を鐫りし

と海の代は波はまきまきつゝいづれかぬもの水はたはた

此と夫より歌浦とつづるや三日の間日本十四箇國二島里八二千七百  
二十箇野人の數ハ男子十九億九萬四千百廿人女子ハ二十五億九萬四千八  
百二十一人男女合せて四十五億八萬八千九百五十一人あり海内を巡視しし  
ハこの益り事ありし國々の境とありんが爲二一ハ伽藍創建の勝地とあり  
しんがこころ御墓所と定めんが爲斯て二一ハ西の刺大和の岡本  
の宮に還御しし此紀行と著し 天皇よ上より是と雲上紀とつづるや此時不  
二峯より歸るとり眸とめりしや一ハ幾内河内の分野ハ五色の瑞光天ノ輝  
く今の五字峯皇より實に過去七佛轉法輪の砌天下の勝地あり皇太子驪  
の駒より下させの地と号けて駒ヶ谷村とあり厥后 推古帝廿七年御墓成  
築に同廿八年母后と此に葬りし其雲合龍の轅とつづるや樟の大樹と

成て今もそと大來木と号け同廿九年太子斑鳩の宮とて妃と共薨りし  
遂に二尸もろに蔵りて之骨一廟を尊仰し号け東ノ御文帝 用明天皇の山陵  
りし其良小 孝徳帝等ハ 推古帝坤ハ 敏達帝等の廟陵嚴々としてあれと  
寺僧跡を梅花の御陵とて其餘大臣夫人の丘墓許ありし此御墓山と  
建させの時詔して守戸の僧坊十宇方六町の境地と宛りし其後七堂  
伽藍と建宮一若干の寺産と寄りし寺と叡福寺と号し

推古帝より 後宇多院まで四十代のりしと帝代より臨幸の車駕と  
わたりし役優婆塞も普門石と建く行法練修一弘法大師も二百日ハ  
泰籠のりして結界石と建りし奇石の碑銘瑪瑙の靈文頼朝塔政子墳良  
觀願蓮二師の墓不動石関伽井も其余名蹟多し實に高麗の僧惠慈が上  
宮太子の薨御と聞て大に悲しし大日本國ハ聖人より上宮豊聡耳皇子  
と稱羨ししは皆宏徳の顕然とつづるや又當山の什寶もハ

安樂行品一卷 推古帝の御宸筆 南無佛御影一軀





皇太子諸國の  
靈地と巡行

菊川竹溪画



普文品一卷 用明帝御宸筆 高麗笛一管 太子御所持

大穴笛一管 用明帝御所持建久三年七月廿八日御寄附

心經 弘法大師筆 瑪瑙之記文 前記 金銅十二面觀音 弘法大師作

立像弥勒 安阿弥作 金銅不動尊 弘法大師作 金銅曼陀天 皇太子御作

天竺佛楊柳觀音 厨子白檀 大黑天 傳教大師作 弥勒佛一軀 鳥佛師作

唐佛金銅如意輪觀音 柳子の生香木 金銅愛染明王 大師作

馬郎婦觀音 碼碯のりつて刻れ婦人の左の膝より小児を安んず其作絶妙なり

金銅不動尊 弘法大師作 座像弥勒佛 昆首場磨作 釈迦誕生佛 灌佛の像

能作生玉 弘法大師 大乗木太子 考養の尊影 南無佛御影 二軀 七寶念珠

佛舍利一粒 欽明帝御所持 同二粒 推古帝御所持 伎樂面同樂器

佛舍利四粒 昔の塔の真柱より出現し建曆元年四月二十日法然上人の弟子

寶印 金堂より例年正月天下 名月玉 明玉 尊勝陀羅尼 聖宝上人筆

法華八軸 太平の祈禱是れ用也 一呂宮内親王常子御筆 外題ハ後西院御宸翰

南無佛像 太子御筆 二臂如意輪觀音 金剛筆 不動尊 弘法大師筆

皇太子繪傳 土佐將監筆 馬上太子 細川氏綱筆 尊勝曼荼羅 弘法大師筆

太子繪傳三卷 外題ハ後水尾帝御宸筆 五十人の筆より別紙に記す

太子四十二歳御影 太子御自筆 弘法大師御影 大師自筆

太子四十二歳撰政像 藤我臣筆 十二佛 三千佛 佛名會本尊 湿槃像

六臂如意輪 代々繪寺 當山古伽藍圖畫

前帝御代々尊跡 青蓮院尊純法親王筆

高屋連技人墓 當寺の東慶徳堂の辺田圃の間より延享年中此地より墓誌と堀り

故正六位上常陸国 大目高屋連技人之 墓寶龜七年歲次丙辰十一月乙卯朔廿八日壬午葬

長八寸 巾六寸 厚二寸餘 寶龜七年八月皇四十九代 光仁天皇御守あり 今嘉永元年小至て千七百三十二年及び







三姫皇子に  
傳さるる



馬子大臣塚

西方院一町とく東の方民家の前より

元亨釈書云獲我大臣馬子の禰目の子あり厥らの皇子とカを我せて佛事と  
 與行せりこれ三十二代 敏達天皇十二年九月より百濟の鹿深臣除勒の  
 石像と持より馬子の墓とを得り宅の東に於て殿を營み安置せり  
 惠便法師と清師とてあり事三十四代 推古天皇二十二年より  
 病うつし故八月に至りゆき上宮太子とれを勸りて出家せりゆき此故に  
 太子と拜し具戒と受て薨せり

日本通記云 推古天皇御宇  
 二十四年夏五月獲我馬子卒

傳云馬子性謀畧あり亦辨才あり佛法を恭敬し鳥河のわらわら家以て庭  
 中一小池を開き嶋と池中に興り時の人鳥の大臣とあり

仙人嶽南林寺

西方院の南より 叡福寺古伽藍講堂の跡あり

本尊阿陀陀佛

座像二尺五寸 服士觀音地藏俱に聖德太子の御作

毘沙門天王

座像二尺五寸 弘法大師高城修行之とて磯長の靈廟に夏泰龍有  
 の兵鬩かき漸く三尊且此尊天觀喜天の災を免る中興の開基 和州法隆寺より出  
 てこれ錫より苦修練行ありは斯る後水尾上皇御依りなり行幸ありて



如蓋と修造し、招いて仙人嶽南林寺と号して寺内に甘露杯と一椀一鉢あり、  
上皇當山へ行宮のよびのひしと云

當寺什寶

天造石像大黒天 厨子に入る表羅漢十六羅漢八祖背ノ羅漢  
五彩五輪塔婆 如來荒神、門天吉祥天、北斗七星、九曜星

佛舍利 明惠上人春日明神より 舍利塔一基 後水尾法皇御寄附

法皇宸影 林立寺官光子内親王の丹青也 弥陀名號 法皇宸翰

法皇宸詠和歌一幅

皇太子二十五歲影 御自筆 同十六歲影 妹子大臣筆

此余數種のりよりに畧し

葉室佛眼寺 上太子領内葉室村より真言宗

本尊 千手觀音 右大將頼朝の守本尊、長八寸許の入覺法皇十九歲

五本松 堂前あり傳云む、花山法皇、齋野より、及入かたりて、あまの植むと

觀音靈驗記真鈔曰

花山法皇御歲十九歲、出家おされ神昇り、僧と尋ひ、河内國石河郡  
聖德太子の墓所、勅使とされ、何國もや、聖二人忽然と來り、御り勅使、の聖  
の姿と見、眼より金色の光とあり、人あり、此人と召具して上洛、御覽あま、  
眼より金色は光とあり、人あり、則ち御名と佛眼上人と宣旨とあり、下され、ひて戒  
師の御房、おされ、帝十九歳の時、玉髪と落し、御出家おされ、則ち御法  
名と父覺叡信と号し奉る、斯て永延二年戊子の歲、二月十五日、花山法皇大裡と出  
御おされ、佛眼上人と先達とて、二十三日所の觀音の頃禮と修行の、今後、同辛  
六月朔、吳裡歸り、ひて一日逗留りて、還らんと、の、法皇暫く留り、な、  
い、熊野山證誠殿、用り、佛眼上人、化して去り、其後、法皇の宣旨、  
此間の佛眼上人、熊野權現の衰化と在り、あり、斯る貴き事、八世、有るべ、  
ト、これ、佛眼上人、推現の化身、して、法皇と靈場、導き、さ、の、所、と、  
當寺草創の年、歴詳、ち、唯佛眼の関基と言傳、今大廢、





勅使聖王  
皇都  
伴

半山



敏達天皇陵

上太子の領内、乘室村あり、磯長中尾の陵なり。上太子より坤一、二百六十字と  
天王山より筑山とてめり、他外のすより土堤あり、廻り凡そ百六十間、  
山ハ等より乾の方長く東南の方と地形高し、此高き地方産あり

前王廟陵記

河内、磯長、中尾、陵、譯、語、田、宮、御、宇、敏、達、天、皇、在、河、内、國、  
石川郡、兆域、東、西、三、町、南、北、二、町、守、戸、五、烟、諸、陵、式

人皇二十一代

敏達天皇ハ、欽明天皇第二の皇子として諱ハ、  
大珠敷と申奉る御母ハ石姫皇后と曰ハ、天皇佛法を信トり、  
文史を愛し、元元年四月物部弓削守屋大連と以て大連とす、事  
如く蘇我馬子宿禰と以て大臣とシ、十四年の春二月國中一疫疾行リ  
て民死とる者衆し、三月丁巳朔日物部守屋大連中臣勝海大夫と  
奏して曰く何ち故とや臣が言へ奉る旨と用ひ、既一考の天皇  
より陛下及び疫疾流行ハ國民是が為、絶べ、豈専ら我馬  
子が佛法興行とるに由、此ぞ哉、帝守屋小詔して曰く汝が言然り宜し佛  
法と断じ是に依て守屋自寺に詣つて佛塔と斫倒し佛像及び佛殿と燃れ

其焼余るるところの佛像とあり、難波の堀江一葉も是日雲無して  
風と雨とあり頻あり又有司一命トシ善信尼司馬達等と衣と奪  
い海石市の亭に禁錮し同年秋八月乙酉朔己亥、天皇崩、時一壽一  
八在位十四年、委八月本紀見たり

石姫皇后墓

敏達帝の陵の域内にあり、石姫ハ、宣化天皇の皇女、欽明天皇の皇后

推古天皇陵

山田村の領内にあり、磯長山田の陵と号し、字高塚、山田園の中の築山あり、  
山ハ惣じて南北に長く、東の方ハ切、廣げ畑とる、南西北の方ハ松林、  
惣根の周りに凡そ余間、東の方一洞、石あり、右の下の方より、御石指見あり

前王廟陵記云

磯長山田、陵、小、治、田、宮、御、宇、推、古、天、皇、  
在、河、内、國、石、川、郡、兆、域、東、西、二、町、南、北、二、町、陵、戸、一、烟、  
守、戸、四、烟、延、喜、諸、陵、式

扶桑略記曰、康平二年六月二日、河内、國、司、言、上、盜、人、發、  
推古天皇、山陵之由

人皇第二十四代

推古天皇諱ハ、豐御食炊屋姫、欽明天皇第九の皇女  
として、用明天皇同母の御妹あり、幼とてハ、額田部皇女と曰ハ、



色端麗進止軌制年十八して 敏達帝の皇后に立り天皇崩す  
のしく後 用明崇峻の兩帝を歴る二十九歳して豊備宮に即位  
しは是本朝女帝の始めなり二十六年二月 天皇崩る郡臣に遺  
詔して曰く此年五穀登らば百姓甚むと飢也其朕がよむに大いに  
陵と興し葬るんと厚くとも事おくれと遂に崩る時七十五歳秋  
九月 天皇と葬る遺詔に従ひ葬る薄く竹田の皇子の陵に  
合葬す 本朝通紀の傳に見る然るに此陵は竹田皇子合葬の地とす

二子塚

推古天皇の陵の東にあり二つありとて名に其事跡詳らざる

用明天皇陵

上太子領内春日村にあり字に圓明土より惣体南北長く上樹木繁  
茂に圍り池あり土堤とて山の間で凡百六十余間

前王廟陵記云

河内磯長有陵磐余池邊列槻宮御宇用明天皇在河  
内國石川郡北城東西二町南北三町守戸三烟 諸陵式  
古事記曰科長中陵

人皇第二十三代 用明天皇

欽明天皇第四の皇子あり諱は橘豊日

と申奉る御母は堅塩媛と曰く蘇我稲目宿禰が女あり元春春正月  
穴穂部間人皇女とて皇后に是は一生をまじり次四皇子ありて其一  
と厩戸皇子の是則ち聖德太子の御事なり在位僅に二年して  
崩る時一壽四十八磐余池の上の陵に葬る 推古天皇元年秋九月  
河内國磯長陵に改葬る則ち崩御より七年の後改めあり  
春日神社 春日村にあり當村の生土神に此春日村は和街道の通路にして駈る各々  
當麻に越る道とあり世に岩屋越といふ  
妙見寺 春日村より良の山中にあり天台宗に号は禪宗なり

本尊 十二面觀世音

長一尺初瀬觀音の摸形にして同木なり  
服士天照太神 春日明神と安ん

竹良郷墓碑

當寺付室あり 石長二尺許 濶一尺  
古墳の趾は山田村の領内行原山にあり碑文は形浦山とあり後垂行原山と言訛るるに  
心墓碑は其地より後一當寺に掘り出る

関基

蘇我馬子大臣 推古帝三十四年五月戊子朔丁未二十日薨  
中興 鎌田氏末裔尊星院殿喜雲淨悅居士寛文七年三月廿三日卒



墓碑

飛鳥淨原大朝廷大弁  
官直大貳采女竹良卿  
請造墓形浦山地四十  
代他人莫上致木犯穢  
傍地也

己丑年十二月廿五日

飛鳥淨原の宮小御宇十八人皇四代 天武天皇一して竹良卿日本紀小竹羅  
又々良筑羅も書り形浦山六當春日村一ありて采女氏の吉地なり土人  
汎つて丘平山行原山ふとつり四十代 方五尺とりつて一歩より四十代二百  
歩あり己丑年四十一代 持統天皇三年己丑なり  
今嘉永元年まで凡千六百十  
年のむあり

紀廣純女吉継墓誌

當寺の境内一邱陵ありて上人字と茶白山といふ是古墓の地一して後年土  
中より墓誌出ばまらち古瓦一斤なり今妙見寺の竹物といふ此ところハ紀氏の  
吉地なり  
古瓦 長八寸二分 闊五寸分 厚二寸  
背一布痕あり精密の瓦製なり

墓誌云

維延曆三年歲次甲子朔癸酉丁酉  
西參議從四位下陸奥國按察使  
兼守鎮守副將軍勳四等紀氏諱  
廣純之女吉継墓志

延曆二年八月八日皇五十代 桓武天皇の  
御宇あり廣繼ハ陸奥守となり按察使  
不補せし依此碑の年より今嘉永元年  
に至る凡千六十五年のむあり  
宝龜十一年春三月奥州の夷賊伊治  
咎磨乱起一廣繼と攻る是に依て終  
咎磨が為に殺さる事續日本紀に見る

尚奉一八田氏の金石志に出る

續日本紀曰

廣繼大納言兼中務卿正二位麻呂之孫左衛士督從四位下宇美之子  
也寶龜中出為陸奥守尋補按察使在職視事見稱轉濟

牡丹巖窟

春日村の山中より字と塚原といふ口の廣さ五間より深さ二間許むり  
所出せし跡あり又北の方口の廣さ八尺むり奥のうらさ限るる  
大平といふ又辺り塚あり事實詳なり

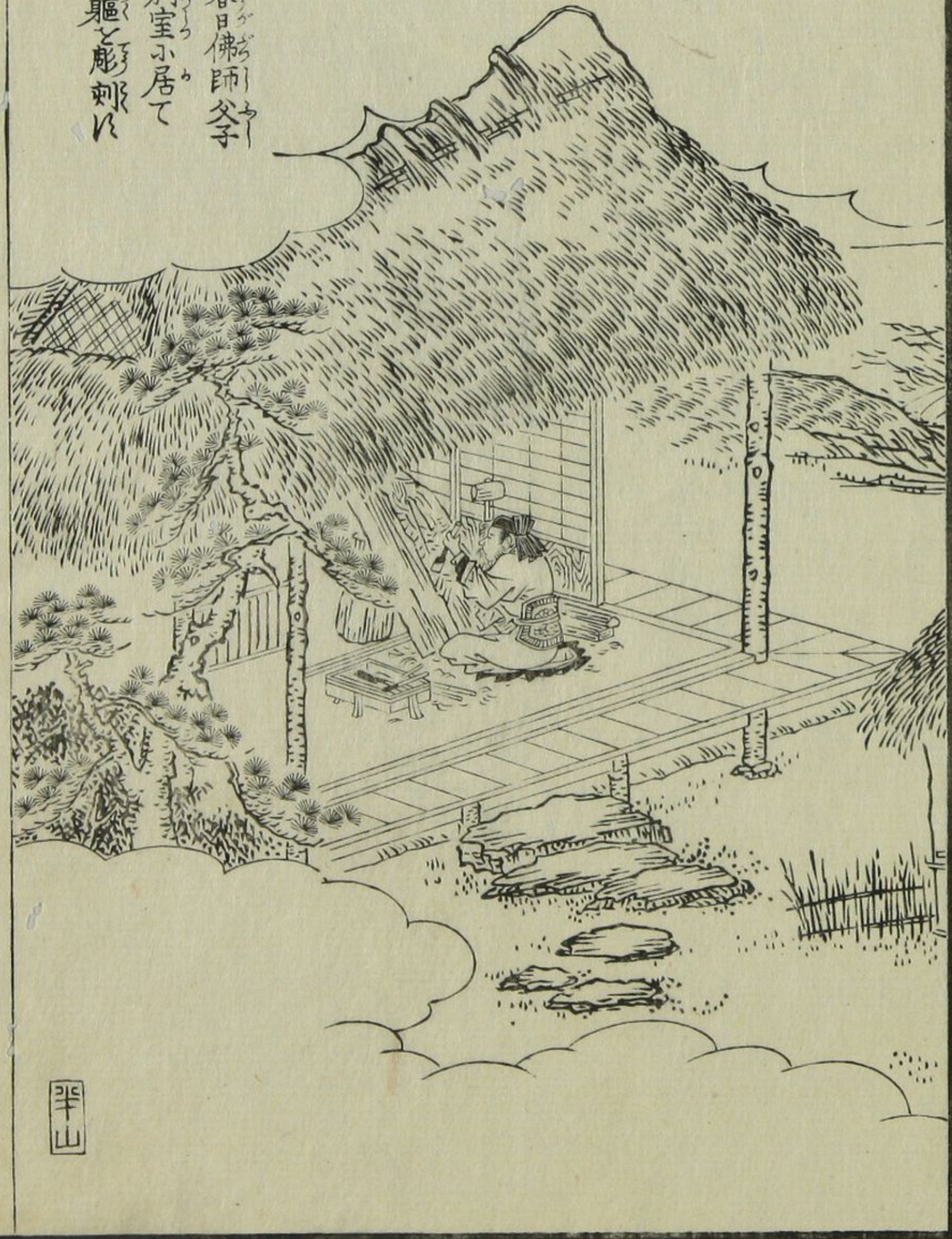
春日佛師故居

春日村あり誓文會といつる佛子の住居故に世々春日佛師といふ  
往古佛工の名人として古刹ハ作佛多し

大和鑑云河内國春日部の佛工誓文會唐土に入て佛を造る法を學ぶ在  
唐の間妾のり文會飯朝の後男子と生む誓文王勳と号し一説ハ誓文會誓  
主勳ハ兄弟なり



春日佛師父子  
別室小居て  
一軀之彫刻以



平山



西五ノ五十三



盛長の日母に向ひて又が名を問ふ母がいつく汝が父は日本の人菟首文會といふ由  
と答へ菟首主動ともつち日本に來つて文會よりいふことも又子の親と印と  
すべし品あり文會がうつく我と汝と佛軀半はと作り造立の後あれと合せ  
遣ふ事あり眞の父子はとんと別室におくると是と刺し合せ見よ少も  
遠く事ある故文會信用して又子のまゝみづりたまへ

飛鳥戸神社

飛鳥村あり此飛鳥村ハ駒ヶ谷より春日のつら中間にあり則ち街道あり  
今古市郡に属し延喜式に安宿郡といひ後世郡界かへる

延喜式神名帳 飛鳥戸神社 名神月次新章 安宿郡五坐の其一あり  
二代實錄云

貞觀元年八月十二日丙申授河内國無位飛鳥戸神正四位下  
二年十月十五日辛卯河内國正四位下飛鳥戸神列於官社  
元慶四年八月廿九日庚戌河内國飛鳥戸神社賜田一町以充春秋  
祭祀之費縁氏人主稅助外從五位下百濟宿祿有雄主殿權允正六  
位上御春朝且有垂等之請也  
今牛頭天王と稱は此所の生土神といふ 例祭九月九日宮寺常林寺といふ行基の  
開基して 聖武帝の勅額所なり今荒廢して古のまゝなり  
智光法師の古蹟も此常林寺ありと聞ゆ

當摩徑踰

駒ヶ谷より飛鳥と登て田辺國分あたりに行道あり土人五十村越といふ  
此道は稀にしかば只推天の通路の

仁德天皇第一の皇子 履中天皇の太子とてまゝ十八時羽田矢代宿祿  
とつる臣下の女黒媛といふ妃とせんて舎弟の任吉仲皇子に吉日と  
撰んで迎へて命しめし仲皇子偽つて彼黒媛と奸し其上密に  
兵を發して太子の宮殿を圍み太子を弑せんと議し平郡物部の臣  
等此事を太子に奏して乘馬を扶けて大和國小述にむ仲皇子是  
をりて太子の宮火と放ち焚立ると急あり太子もて河内の  
國埴生坂にて難波の方を顧みれば火の光熾なり大ふむらひ危急存亡  
の刻なりとて鞭をうて馳れ今の竹内越と大坂山口の飛鳥山といふ  
中より少女を遇ひ此山中に賊兵ありやと尋ひ少女答て劍成  
ぬき弓矢を持し海兵等山谷を充滿し早く元の道とせし戻  
りて當摩徑より越せりといふ太子大に悦びし

於明佐箇珥阿布夜烏等謎鳥詔知度沛麼哆駄珥破能邏孺哆







此地より隼人曾婆訶里小沼して先汝と賞し明日上幸とて  
して假宮と山口に造り隼人賜ひ大臣の位とて百官とて拜せし  
豊樂とあそむ隼人大に歡ぶ宴畢て後勇士とて罪の次第と言ふ  
せ是と誅しつ明日上幸の詔とてつて以て其地と歸して飛鳥の  
より又飛鳥川の側瀬と愛さつても隼人が賞罪よもも言へり  
前に出せる日谷推宮社一昨夜抜後しつて六則ち此時の事と聞ゆ

**山田磨墓**

山田村佛陀寺の境内門前の傍より

**親鸞聖人脚腰掛石**

同寺本堂の傍より聖人むり上宮太子の脚腰山小誦しつて時  
一想ひのよと此寺の兩基ハ泰盛光ありし用也

**岩屋竹内両道岐路**

山田村より右の方ハ竹内峠と越え和州葛下郡長尾村に出る  
當摩寺に祭諸せんといふ者左の方の細道と行てられ成岩

**科長神社**

山田村東條あり延喜式出石川郡九座の其二あり  
額ハ社明神元禄五年五月葉室正二位前權大納言藤原頼孝郷海筆

**雛形兜**

神主の家ハ截傳云往古神功皇后ニ韓退治の時  
武器成洞んとてこれを是ははつて夫より兵器と多く

製らせのへくを其形古雅してひさし  
より来りも當麻より出るもつて落合く是よりむりハ一とあり  
原ハ二上権現と稱して山峯あり古跡ハ今蟻子祠と鎮坐  
境内ハ精水といつりつて當麻鍛冶鍛ひの湯に用ひしと又ハ勢水といふ

**妹子大臣塚**

同所科長神社の南一町より

**萬法蔵院廢跡**

同村の山キあり高浦谷といふ所法蔵院ハ今の當麻寺といふ其  
用明天皇第の王子麻曾王子の創建とて廢寺とて引向鳳二年大和國

**鳥帽子石**

同村の山中の池の中より形とりて不動石 同村の南流川の中より  
各一ト此地の字と上田といふ 葛城登山修驗者の行處

**二上嶽**

河内大和の兩國に跨る二峯ありて男嶽女嶽といふ尚大和國當麻の所に出

**名産金剛鑽**

二上山より流き出る溪川の中より山田の村民此溪中へ入て下流より  
地の見せりてすすい鑽とて真砂と沙汰あり金剛鑽と稱して小桶たて

**抱岩**

瑪瑙琥珀のたぐひの玉石と鑽とて用也  
二上嶽の麓鹿向谷の入口高取池の上より

**古松堅巖**

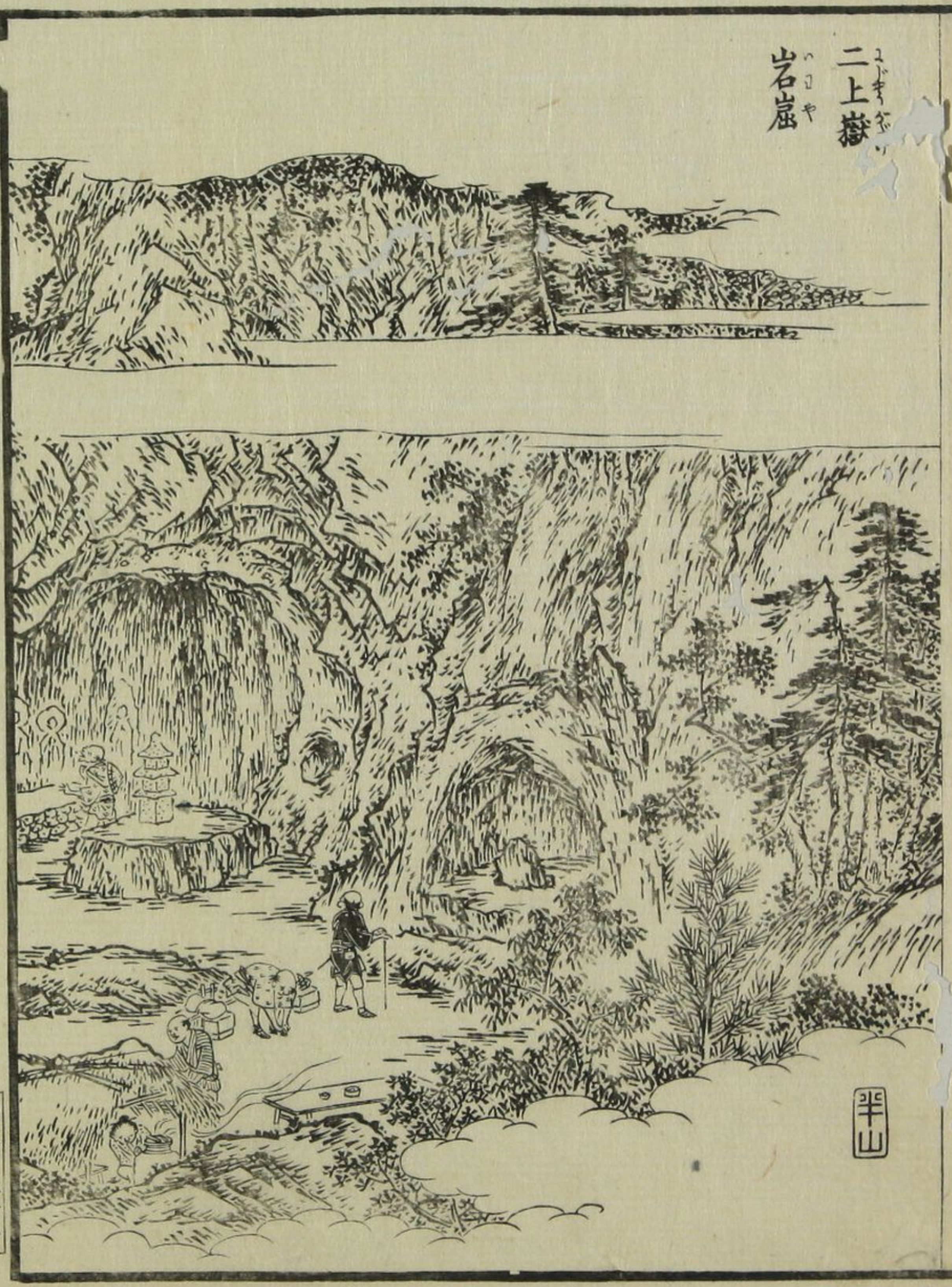
鹿向谷より山田より一里あり東地より高き九間半中二間より  
古松一本あり早天も枯るる時蒼蒼として數百年と経り九間余の山

**観岩**

上あき巴地中のよりわいら主氣も通せし只雨露の扶けをり古老の云首より今の如  
枝葉もびびる抹も太らげ又瘦る事なく同事なりとて定國中の奇觀といふ

ち岩の西に双ぶ高サ四丈をり岩根の深きとて凡て此辺りハ巨巖なり





二上嶽  
岩窟

西五ノ五十七

半山







本々其業内とくくく尋りていふべしづれも是れは八山の此方なり次の巻八山と打く  
當り下り所より始む

西國三十三所名所圖會卷之五終



